

武装

青年共産同盟

目 次

「武装」創刊にあたって	1
大学非常事態立法粉碎。全国学園占拠ゼネストに起て！—— 愛知訪米阻止。三里塚ボーリング粉碎にむけてさらに進撃せよ！ —— 4・28闘争の総括と展望	2
激化するアジア危機と沖縄・安保	8
青年共産同盟結成宣言・規約	17
青年共産同盟の当面する任務について	24
プロレタリア日本革命と学生戦線	35
大衆闘争と遊撃戦の結合へ	40
何が東大闘争に問われていたか	47

「武装」創刊にあたって

万国の抑圧された労働者・人民は団結せよ！
ブルジョア支配階級と彼らの「友人」を打倒するために武装せよ！
叛乱戦線を全世界に拡大せよ！

帝国主義世界は、ドゴール退陣によつて一層危機——体制崩壊——を深めている。
国際通貨体制の新たな危機は、各国ブルジョアジーに、より強固な官僚執行権力独裁体制の登場を死活問題として要請している。

実際、フランスブルジョアジーの分派闘争の始まりと、軍部財界右派の支持によるボンピドーの登場の意味することは、ドゴール体制以上の強権体制の確立とそれによる五月革命の「譲歩」のとり戻し 新たな抑圧を告げるものに他ならない。

そして今やわれわれの眼前で進行している歴史は戦後帝国主義世界の「フランス化」なのだ。

帝国主義の危機は開始され、急速に煮つまつつある。

ブルジョア支配階級の強権的支配と抑圧が急速に準備されている。

万国の労働者・人民は武装せよ！

一切のブルジョア秩序に敢然と「ノン」をたたきつけ叛乱を開始せよ！

青年共産同盟は万国の労働者・人民の解放をめざして、抑圧された人民の叛乱戦線と固く連帯し、進撃する。

「武装」を諸君におくり続ける。全ての勇敢な叛乱者への闘いの指針として。

一九六九年五月十五日

青年共産同盟編集委員会

大学非常事態立法粉碎。全国学園占拠ゼネストに起て！

愛知訪米阻止。三里塚ボーリング粉碎にむけさらに進撃せよ！

——四・二八闘争の総括と展望——

【一】

全国の先進的労働者・学生諸君！

青年共産同盟の同志諸君！

四・二八安保粉碎・沖縄解放闘争は、万余の労働者・学生の手によつて、都心副都心における実力闘争としてかちとられた。

日本における安保階級闘争は、昨年の一〇・二一新宿闘争・学園占拠闘争、そして、今年の四・二八闘争へと、職場・学園闘争と街頭闘争において激しい攻防戦をくりかえしながら、次第につまりつつある。

一方、ヨーロッパ階級情勢は、同じ四月二八日、フランスのドゴール辞任によつて、たちまちその危機的様相を深めている。「五月」は発端であつて、決して、なんらの終止符を意味しなかつた。「五月」によつてもたらされたフランス危機とその処理をめぐるフランスブルジョワジーの内

紛れドゴールの失脚は、ついに欧州通貨体制全体に飛び火しようとしている。そして、それをおして、全欧州の国内危機への転換ヨーロッパ諸国全体の「フランス化」がもたらされようとしているのだ。

また、ベトナムを始めとしたアジア階級闘争も、北朝鮮をめぐる軍事的緊迫化によつて、戦線の拡大と日米安保の反革命的強化が促進されている。

先進的労働者・学生諸君！

同志諸君！

全世界の階級闘争が巨大な激動を開始するなかで、われわれは、それを果すために、青年共産同盟結成後はじめて迎えたこの四・二八闘争の試練を総括し、当面のわれわれの方針を明らかにしようではないか。

【二】（四・二八闘争の総括）

四・二八闘争を総括するにあつて、われわれが最初に確認しなければならないのは、四・二八闘争が階級闘争に占めていた位置と任務であるだろう。そのために、四・二八に至るまでの階級闘争全体の基本的過程を簡単にふりかえつてみる必要がある。

まず、六八年（六八年）にかけてアメリカ帝国主義の北爆と大量軍事介入によつてもたらされたベトナム戦争の大規模な拡大、そしてベトナム人民の熾烈な徹底攻戦につき動かれて、全体的基調としては「ベトナム反戦」運動としての闘いがくりひろげられた。その中で、六七年羽田、六八年一月エンター、三月王子野戦、五月成田三里塚へと、実力基地闘争を中心とする闘いが開始された。

次に、六八年六月以降、六・一五のセクト的分裂をきっかけに街頭闘争基地闘争は一頓座。むしろ日大・東大闘争を両軸とした学園占拠・学生反乱闘争の開始と全国的発展が特徴的であつた。

そして、六八年一〇・二一新宿闘争へ。一連のベトナム反戦、実力基地闘争と東大・日大を頂点とする学園闘争・職場闘争の相互促進的發展が、六八年一〇・二一新宿闘争として爆発した。この新宿闘争は、はじめて密集した大衆の拠点制圧闘争としてかちとられ、一万名にものぼる機動隊、国家権力の無力性が余すところなく暴露された。こゝ

に安保階級闘争はベトナム反戦から、学園階級闘争を媒介にして、大衆的武装を背景にした本格的都市反乱闘争の段階へ突入したのである。

一〇・二一以降の帝国主義支配階級の巻返しと学園総攻撃。一〇・二一闘争は、安保を軸とするブルジョワ支配秩序に対する真正面からの挑戦であつた。支配階級はこれに恐怖し全権力を動員して闘いの弾圧に乗りだした。

かれらは、六七年の段階において、むしろベトナム人民の英雄的な革命戦争の前進に突き動かされ、そのアジア全体と日本階級闘争への波及をおそれ、原潜・エンターの導入・佐藤のベトナム訪問など日米安保の反革命的強化に乗りだしたのであつた。今や、彼ら支配階級は、一〇・二一以来日本階級闘争の昂揚・学園占拠闘争と街頭制圧闘争の発展および職場占拠闘争への波及をくいこめようと必死である。七十年を前にして、当面攻撃の照準は大学占拠闘争の壊滅と街頭闘争の先制的鎮圧に向けられている。そのためかれらは、一〇・二一騒乱罪適用と一一・七闘争への徹底弾圧を行ない今年一月、空前の機動隊と武器を用いた東大攻撃を行なったのだ。そして、東大攻撃を突破口に、全国学園闘争の総攻撃に着手した。

こうして、巻き返に転じた支配階級は、闘いの昂揚の拠点となつてきた学園闘争への追撃、街頭闘争との分断化を狙い四月に臨んだ。

従つて、以上のような過程を経て迎えたわれわれの四・二八闘争の位置と任務は次のとおりであつた。

すなわち、敵の街頭と学園・職場との分断攻撃に対して東大攻撃以降拡散していた実力闘争部隊を大規模に再結集し、強化された敵の弾圧体制を、その弱点である都心・副都心の交通線の大衆的制圧によつて打砕くこと―まさに一〇・二一に創り出された都市反乱闘争の萌芽を目的意識的に発展させ総反撃の突破口・七〇年安保工場学園占拠ゼネストへの展望を切り拓くものとして闘いとることであつただろう。

以上のように、四・二八闘争をめぐる階級情勢とその任務が設定されていたのに対し、実際の闘いは、どのようなものとして実現したであろうか。

まず、四・二八闘争は、反戦系を中心とする労働者と、東大全共闘約一〇〇〇名をはじめとする学生の、約八〇〇〇―一〇〇〇〇の結集をもつて闘かれた。これは、首都を中心とした先進的労働者・学生の総決起と再結集とを意味していた。

そして、東京―銀座―新橋周辺における駅占拠・街頭戦はじめ、神田―御茶ノ水、渋谷、上野等の街頭戦を闘い、都心・副都心交通線の制圧をめざし闘つた。

このデモの延長として、実力デモを官庁街や国会にかけることにあるのではないだろう。それは、新宿闘争が端的に示したように、戦闘部隊を中軸としたところの密集した大衆による拠点制圧闘争として貫徹されなければならない。しかもそれは、その連続的展開を通して、権力の発動を粉碎し、無力性を暴露し、実は、全労働者階級の工場・職場占拠ゼネストへと導くところに真の任務があるのだ。こうした基本戦術―都市反乱闘争への追及という視点から、四・二八闘争をみた場合に、明らかに、霞ヶ関と東京・新橋とが何の位置づけもなされないまま、結果的にわれわれが設定した都心駅占拠・交通線制圧へと向つたものであつた。従つて、そこでは、駅占拠闘争・交通線制圧闘争の積極的意味は何もあらかじめ位置づけられていなかったのだ。

新左翼系諸派のこうした行動方針上の不明確さ、混乱は、決して偶然もたらされたものではない。それは、今日の階級情勢が、世界危機の開始された時点にあり、ブルジョア執行権力の独裁化の前に、プロレタリア既成指導部が破綻を大衆的に宣告されはじめていること、学生・未組織労働者をはじめ、基幹労働者階級内部にも、それを越える実力闘争の萌芽が生まれていること、それが、安保闘争を軸にしながら、ますます非和解的対立につきすすみつつあること、というよりは、戦略的把握があつてはじめて、街頭制圧戦―工場占拠ゼネストといった展望をもつた基本戦術が

これに対して権力側は、霞ヶ関・官庁街の防衛に追いこまれ、各所でその限界が暴露された。

こうして、四・二八闘争は、実力闘争部隊の基本的な再結集と、敵権力の「防衛」路線の破綻及び街頭域の展開という成果をもたらした全体としての反撃に転じたと言えよう。だが四・二八闘争が結果的に示した成果を確認した上でわれわれはそれがついていた不十分な点を総括しなければならない。

第一に、四・二八当日に行なわれた行動の極めて意志統一を欠いた混乱を指摘しなければならない。とくに、東京―新橋駅における行動方針において、それが著しかつたと言わざるを得ない。

そして、その最大の原因は、中核派をはじめとする左翼諸派が、叫んできた「霞ヶ関 中央権力中枢占拠」というスローガンが、果して政治的宣伝スローガンであるのか、あるいは、文字通りの行動スローガンであるのか全く区別がついていなかった点にある。(もちろん、霞ヶ関の官庁街や国会が権力の中核であるのか?という極めて素朴で正当な疑問があることはいうまでもなからうが―それは一応別としても―行ける所まで行くというだけでは、戦術にも方針にもならない。問題は、今日の階級情勢に対する戦略的な把握を基礎に、街頭実力闘争の基本戦術がなにあるのかという点にある。それは決して、従来からのカンパニア

設定されうるのだ。

こうした戦略戦術の欠落からくる行動方針の不明確さと混乱、指導放棄は、われわれの手によつて早急に克服されなければならぬ。四・二八闘争のもつ、基本的な総反撃への積極的な意義と、その指導上の限界とを総括し、われわれはただちに五月―六月闘争から、佐藤訪米阻止闘争への体制を作る必要があるであろう。敵権力は、四・二八の限界につけこみ、一気に大学非常事態立法を今回に提出、新たな攻撃へと転じつつあるからだ。

【三】 (当面の方針)

政府自民党は、四・二八闘争を前後して、急速に「大学特別法案」の今国会成立をめざし、動きはじめた。四月三〇日の中教審答申につづいて、五月に入り、文部省案が作成された。

その内容は、紛争大学として認定された大学に対し、

(1)臨時運営委員会を設置して教授会・評議会の権限を掌握させる。そして、文部大臣・学長が協議して、一時休校、立入禁止等の措置をとる。(2)六ヶ月以上続いた時には、「一時休校」にし再建委員会をおく。また、収拾を防げる教官は休職処分にする。(3)さらに六ヶ月続いた時は廃校等の処置をとる。

ほゞ以上が文部省案である。彼らは、野党との党首会談をもち、国会成立をめざして策動を開始している。

この「大学非常事態立法」とも呼ぶべき、今回の攻撃の性格は一体何であろうか。いうまでもなく、今度の立法化は、大学のブルジョワ的秩序を拒否して起ちあかつた全国の学生反乱闘争に対して打ちだされたものである。

従つて、六二年提出された「大管法」のように、国立系大学を対象にし、教育制度としての改編をめざした攻撃とは質を異にしている。彼らは、東大・日大闘争の過程を「総括」して、大学内部の権限を臨時執行部に集中させ、文部大臣と学長との協議によつて権力の介入を円滑にし、東大でも明らかのように、最終的には、権力の実力行使の事後承認とかくれみのための機関へと転化させていくつもりである。そして、そのワクに従わない教官は「休職処分」に処するといふ喝まで加わつてゐるのだ。

学園闘争の発展が、バリケード・占拠闘争に至り学園内部の大衆的階級闘争を生み出し、大衆的武装が推し進めら

れ、さらに、それらを基礎に新宿型の都市反乱闘争へ、あるいは、高校生・労働者階級の基幹部隊の占拠闘争にまで波及する可能性を示したことに對する、「非常立法」が今回の攻撃に他ならない。もはや、これは、特殊「大学」問題、「教育」問題ではない。これは直接の政治攻撃であり、この闘いを抜きにして、愛知訪米阻止も、佐藤訪米阻止の大衆的昂揚もありえないだろう。

日本帝国主義支配階級の安保攻撃は、学園攻撃をおし、さらに一歩進められつつある。とくに、最近の一連の国際情勢もまたそれを一層促進させている。最初に確認したように、フランス「五月革命」の波紋は、国際通貨全体の危機に及ぼうとしている。「五月」の政治危機を、経済的譲歩で乗りきろうとはかつたフランスブルジョアは、その結果、厳しい国際競争戦の中でフランス危機にまで一挙に陥つた。そして、再びこれを取りきるためには、以前にも増して激烈な国内攻勢を加えざるを得ないことは必至なのだ。ド・ゴールは、それをやろうとした場合に予想される恐るべき抵抗「五月」の大規模な再現を見こして、絶対的権限の再確認を「国民投票」によつて賭けた。そして周知のようにそれは、一部のブルジョア（彼らもまた犠牲の一端を強制されるかも知れない）も反対にまわることによつて、失敗に終つた。「五月」とは異なり、フランス労働者階級・学生の大規模な登場は未だ見られていない

にもかかわらず、フランスは明らかに政治的混乱が不可避免となるに至つた。かくして、再び猛烈なマルク・ラッシュとフランス・バンド危機が引起され、欧州通貨市場全体の危機の様相は深まつてゐる。国際的な「支え」が弱体化して

いる現在、国際通貨の破綻は不可避免であり、また、その破綻による各国経済の行詰りと、階級的矛盾の激成もまた不可避免であろう。それゆゑ、現時点では、超越した存在である日本資本主義も国際通貨・貿易の全体に及ぶ世界経済体制の破綻から、おびただしい圧迫を蒙ることは疑いない。

さらに、ベトナム解放戦線の一時的膠着化にも拘らず、アジア階級闘争の戦線はラオス・朝鮮半島へと拡大しようとしてゐる。アメリカ帝国主義は、アジア全域に、ベトナム解放闘争の波及と拡大を阻止するために、軍事戦略の機動化、近代化を推進しつつある。それによつて、朝鮮では、異常な軍事的緊迫化が始まつてゐるのだ。

日本帝国主義は、国内階級闘争の急進展と国際的政治・経済危機の深化に突き動かされ、アスパック会議の主催、愛知外相訪米と沖繩の安保事前協議制への組み込み、三里塚ボーリングの開始など一路七〇年安保反革命体制強化に向つてゐる。

先進的労働者・学友諸君！
同志諸君！

大学非常事態立法粉碎の全国学園占拠ゼネストに起とう。

全学園・職場・工場の実力闘争をもつて愛知外相訪米阻止・三里塚ボーリング粉碎闘争を組織しよう！
佐藤訪米阻止の圧倒的戦列を構築しよう！

職場・学園に安保粉碎行動委員会をつくらう！
青年共産同盟に結集しよう！

激化するアジア危機と沖繩・安保

沖繩。安保闘争の前進のために

序

「沖繩解放・安保粉碎」を真正面からかかけて斗われた四・二八都心制圧闘争は、六月愛知訪米阻止、十一月佐藤訪米阻止を結節点として、七〇年にむけてにつまりつつある安保階級闘争に一段階をかくした。

四・二八闘争の成果をふまえ、沖繩・安保闘争をさらに発展させるために問われている一つの課題は、「沖繩解放・安保粉碎」を都心制圧闘争の政治スローガンから、戦略スローガンへとたかめることだ。

四・二八を前にした三月十五日、米軍スパイ機が朝鮮沖で墜落された事件は、あらためてアジア危機、極東危機の深刻さと、沖繩・安保のあらたな戦略的意義をわれわれにつきつけた。

現局面におけるアジア危機の歴史的性質は何か。それは激化する世界危機の中でいかなる位置を占めるのか。激化する世界危機、アジア危機のなかで沖繩・安保はどのような意義をあらたにかくとくしつつかあるのか。それは日本プロレタリアートに何をつきつけているのか。

こうした諸問題を明確にすることが共産主義者に課せられている。

一、激化するアジア危機の特徴

a、世界危機のなかのアジア危機

アジア危機は、いうまでもなく世界危機の一翼を構成している。

いま直面している世界危機の根本的動力は、帝国主義の戦後世界体制の崩壊であり、とくに、ドル・ポンド国際通貨体制の崩壊（金ブール停止）による経済的世界危機とフランス五月革命に代表される帝国主義の戦後民主主義体制の危機の二つは、世界危機の開始を告げる。

これに対して、ベトナム内戦、インドネシア内乱、インド内乱、パキスタン内乱等々アジア後進諸国の内乱はすでに六五年頃から激化している。

事的どう喝体制をも部分的にマヒさせ、階級闘争の巨大な昂揚の突破口をきりひらいたのである。（フランス五月革命、日本の安保階級闘争の昂揚）。

c、中国プロレタリア革命（文革）との結合

米帝の軍事抑圧力のベトナムへの集中とその破綻は、戦後長期にわたって中国をしめつけてきた核どう喝軍事包囲体制の重圧をはねのけ、プロレタリア革命（文化革命）の昂揚の条件をつくりだした。

逆に、過渡期国家のプロレタリア革命の発展は、後進国階級闘争に対する国際的しつこく（民族ブルジョアジーとの連帯によるプロレタリア革命の抑圧）をつきうごかし、後進国プロレタリアの階級闘争にあらたな発展の条件をつくりだしている。

後進国危機と過渡期国家階級闘争の結合　これがアジア危機の第二の特徴だ。

d、世界経済危機との結合

アジア危機の第三の特徴は、帝国主義の世界危機との結合である。

米帝のベトナム戦の破綻とドル通貨体制の崩壊、英ポ

こうした後進諸国の危機に先進帝国主義国の危機、さらには中国、チエコスロバキア等過渡期国家の危機が付加し結合したところに、今日の世界危機の特徴がある。アジア危機は、後進国・帝国主義国・過渡期国家の三者の危機の複合という性格をもつとも集中的にはらんでいる。

つぎにこの点を具体的にみていこう。

b、米軍事どうかつ体制の破綻

アジア危機の第一の特徴は、ベトナムにおける米軍の破綻——ベトナム人民の階級闘争にたいする軍事的抑圧路線の破綻——をとおして、世界帝国主義のプロレタリア・農民にたいする軍事抑圧体制がその無力性をばくろし、破綻したことである。

このことの意義は重大だ。

のちにみるように、米帝の対ベトナム反革命抑圧体制は対中ソの核どう喝を背景とし、五十万以上の地上軍を大量投入した軍事抑圧体制としては、最高かつ最終的体制であるがゆえに、その破綻は世界階級闘争の昂揚にとつて歴史的突破口をきりひらいたのである。

すなわち、ベトナムにおける米軍事抑圧体制の破綻は、ベトナム階級闘争の永続化の展望をきりひらいただけでなく、帝国主義国プロレタリアにたいする帝国主義の軍

ド危機と英極東軍事力の撤退等々、帝国主義の世界経済体制の危機と軍事政治体制の危機が相互促進的に進行している。

それだけではない。世界経済危機はつぎにみるように、帝国主義国プロレタリア階級闘争の激化を普遍化している。

e、帝国主義国階級闘争との結合

ドル・ポンド通貨体制の崩壊に代表される帝国主義の世界経済編成の危機は、帝国主義国内部のプロレタリア人民への政治的経済的攻撃を不可避とし、そこから帝国主義の戦後国内支配体制——戦後民主主義体制——の崩壊が一般化する。フランス五月革命はその先行的爆発であり、西独・イタリア・英・日本等々で危機が熟している。

こうして後進国プロレタリア人民の階級闘争に帝国主義国プロレタリアートの革命闘争が付加し結合しつつある。これが第四の特徴だ。

f、沖縄・安保のあらたな意義

こうした諸特徴をもつアジア危機の拡大深化は、とうぜん、帝国主義の軍事的抑圧支配体制の流動をひきおこしている。

ハワイ・沖縄・韓国・台湾・南ベトナム、という米帝の極東軍事戦略体制は、上にみたような米帝軍事どう喝体制の破綻（ベトナム）、中国プロレタリア革命、世界経済危機、帝国主義国階級闘争の昂揚の中で、再編をよぎなくされている。

韓国への大空輸送作戦（フォーカス・レチナ）は西独への大空輸送作戦と並ぶ米地上軍（対局地戦争用の戦略「打撃軍」）の本国への集中と「紛争地域」への迅速な投入のシステムであるが、その中で沖縄基地は（要石）の位置を占めている。

また、日帝は「現地軍」＝自衛隊の増強と核武装化を軸として、米極東軍事体制の「肩代り」を強く迫られており名実ともに米帝世界戦略の「前進基地」としての役割を担おうとしている。これはまた、五月革命とドゴール退陣のフランス危機がNATOの再編強化を要請していることと対応する日本におけるプロレタリア階級闘争の発展に対処する反革命策でもある。

こうした（f）アジア危機の拡大深化の意義（f）それにつきうごかされた米帝——日帝のアジア軍事政治抑圧体制の編成強化の方向、（g）そこにおける沖縄・安保の新たな性格、を知るために、われわれは、戦後の米帝のアジア支配体制の形成とその矛盾の展開を歴史的に総括しておかねばならぬ。

二、米帝の軍事どうかつ体制とその破綻

激化するアジア危機の歴史的性格

（一）「全面戦略」体制と朝鮮戦争

（一九四五—五二年）

——核どうかつ体制の端緒的形成——

第二次帝国主義戦争によつてひきおこされた世界危機は、世界的階級闘争の昂揚をうみだした。

アジアにおいては、中国共産党が対国府軍（蒋介石）の内戦を勝利的に闘いぬき、ベトナムでは一九四六年以来内戦（対仏戦をふくむ）が激化し、朝鮮は米ソの分割支配下におかれ、日本でもプロレタリア階級の闘争が急速に高揚した。

この戦後階級闘争にたいする帝国主義的抑圧体制として、米帝を軍事的政治的経済的盟主とする帝国主義の戦後世界体制が形成された。

世界階級闘争にたいする帝国主義のこの段階における対応は、

（一）原爆独占を基礎とするソ連に対する核どう喝体制（封じこめ）

（二）それによる後進国階級闘争の封じこめ

（三）おなじくそれによる西欧・日本ブルジョアジーへの経済的政治的軍事的テコ入と先進国プロレタリアートへのどう喝

以上である。

これは軍事的には「全面戦略」体制とよばれる体制を形成したが、その骨格は、

（一）数千発の原爆とそれを運搬するB50、B36等の戦略爆撃機の保有

（二）これをアジア—中東—欧州—グリーンランド—アイスランド—アラスカ等中ソを包囲する一六三ヶ所の航空基地に配置する。

（三）とくに、対ソ戦略の要地とみられた欧州には核武装した米軍の配置と西欧再軍備の促進（NATO軍）。

すなわち一言でいえば、核戦略爆撃機で「社会主義」諸

国を四方八方から包囲する核どう喝体制である。

こうした「全面戦略」体制は、トルーマン・ドクトリン、マーシャルプラン、NATO結成（一九四九年）をへて形成された。それは同時に、西欧・日本の階級闘争が敗北し体制内化され、帝国主義の経済的世界編成がドル・ポンド体制として「全面戦略」軍事体制を政治的枠組として形成される過程でもあった。

だがこの段階での「全面戦略」核どう喝体制はいまだきわめて幼稚なものであり、朝鮮戦争はその限界を暴露した。すなわち朝鮮戦争が暴露した事実とは、「全面戦略」核空軍どう喝体制が

（一）地上軍による局地戦争にたいして無力であり、
（二）戦略空軍もソ連のミグ戦闘機の防禦網の前に無力である。

という事実であつた。

加えて、ソ連の原爆保有声明（一九四九年）があり、ここに戦後初期の米軍事どう喝体制はその再編を問われたのである。

（二）「周辺戦略」からマクナマラ戦略

へ（一九五三年～六五年）

——軍事どうかつ体制の全面形成へ——

・ギャップ）と中国の一定の国内建設の成功を基礎とする自立化（中ソ対立）という二つの要因によつて再編成（手なおし）をせまられた。

その再編成の要点は、第一に、航空機からミサイルへの核戦略体系の全面移行であり、第二にNATOの核武装化であり、第三に中国封じこめをめざした通常兵器地上軍の復活再強化（「柔軟反応戦略」）である。

こうした帝国主義の世界軍事体制の再編成は、六〇年代にはいつてからケネディ・マクナマラのもとで積極的に推進され、「前衛戦略」と称されている。とくに六五年二月の北爆を機とするベトナム内戦への全面介入と地上軍の大量投入によつて「前衛戦略」の特徴である通常兵器地上軍投入（対ゲリラ部隊をふくむ）は米帝の能力の限界にまでおしすすめられた。

ではこうしたマクナマラ戦略体制は、「核どう喝体制」という帝国主義の軍事戦略体制の従来の基本性格をかえるものなのか。けつしてそうではない。

「前衛戦略」「柔軟反応戦略」体制の基本性格は、

（一）核ミサイル戦略体系と戦術核兵器体系によつて核どうかつ体制を軍事技術的にいつそう高度化し、

（二）それに加うるに、通常兵器・地上軍による軍事抑圧体制をあらたに配置する、

という点にある。

朝鮮戦争は「全面戦略」体制の限界を暴露するとともに世界帝国主義の核どう喝体制の強化拡大の出発点でもあった。

その強化拡大の方向とは、

（一）戦略空軍の強化や水爆保有による「大量報復」体制のいつその強化と地上軍の戦術核兵器による武装（ベントミックス師団）。すなわち全面戦争・局地戦争両面にわたる核兵器への全面的依存体制。

（二）西独加盟によるNATOの反革命帝国主義同盟としての実質化、米帝のインドシナ介入（フランスと交替に）SEATO結成および中東介入ECENTO結成を軸とする中ソ軍事包囲体制の強化、

の二点である。これはアイク政権下に「周辺戦略」「ニールツク戦略」なる名のもとに「まさかえし」を指導理念として遂行された。

ソ連や中国の「平和共存」（スターリンの死去、ソ連共産党二十回大会、平和五原則、等々）は、こうした帝国主義の軍事包囲体制のしめつけにたいして、帝国主義国プロレタリアートや「非同盟諸国」民族ブルジョアジーを総動員して帝国主義に圧力をかけ、その重圧を緩和しようという政策にほかならない。

だがこうした「周辺戦略」による核どう喝体制もソ連のミサイル軍事技術の開発（スプートニクの成功、ミサイル

前者はソ連・中国への核どう喝（とくにソ連を媒介にした世界階級闘争への圧迫）の体制にある。後者はいつまでもなく中国および後進諸国階級闘争の「封じこめ」を目的としたものである。そして、こうした通常兵器・地上軍による軍事抑圧体制もまた、プロレタリア人民の階級闘争に対するどう喝の体系にほかならないのであつて、そのことはベトナム戦争で有名になつた「エスカレーション」なる戦略に端的に示されている。全面核戦争か無か、という二者択一的などう喝の限界を、種々な段階の軍事どう喝で置きなう、という点に「柔軟反応戦略」（エスカレーション）の本質がある。だが、それが実際に階級闘争を「封じこめ」うるかどうかは、また別の問題なのである。

（三）ベトナム戦争と帝国主義の

軍事どうかつ体制の破綻

じつさい一九六五～一九六九年のベトナム人民の徹底抗戦は、米帝の軍事抑圧体制がまさにとどろく。喝の体系にすぎないこと、ベトナム・プロレタリア人民の階級闘争をおさえこむことはできないことを暴露した。

ベトナムで米軍は六五年冬～六六年春と六六年冬～六七年の春の二度にわたつてそれぞれ二〇万、四〇万の米地上軍（加えて現地軍一〇〇万）を投入し一挙に解放戦線を撃

破しようとしたが、これらの作戦はことごとく失敗し、六八年初頭、解放戦線のテト攻勢で「和平会談」におこまれた。

解放戦線にたいする軍事抑圧路線の失敗は、第一に解放戦線が限られた人数からなる正規軍ではなく、不特定多数の「人民軍」であり、したがって原理的に一挙に包囲せんめつするなどということが不可なこと、第二に、米軍・現地軍ともにブルジョアジの傭兵部隊であり、主体的な戦闘任務の遂行に耐ええないこと（大量の投降者・脱走等々）第三に、それを反映して米軍事師団編成における直接戦闘員の比率がきわめて小なること（五〇万の軍隊のうち数万人にすぎない）、等による。

こうしてベトナム戦争は軍事どう喝体制による階級闘争の抑圧・圧殺という帝国主義の世界階級闘争にたいする基本的対応がいままさに破産したことを暴露した。この破産は、すでにみたように、ベトナムに対する米帝の対応が戦後二十数年にわたって形成発展させられた米帝の軍事どう喝体制の最高かつ最終的体制であるがゆえに、歴史的意義をもっている。すなわち、単に特殊ベトナム階級闘争に対する対応において破綻しただけでなく、世界階級闘争にたいする帝国主義の世界的軍事どう喝体制の破綻という世界的普遍的意義をもっているのである。

しえなかつた。戦後、米帝の巨大な生産力を背景としていちおう西欧・日本等帝国主義国においては労働者階級を体制内化しえた（組合主義・議会主義を実体とする戦後民主主義体制）が、後進諸国は一貫して経済危機が続いた。世界経済危機が激化する今日、後進国の経済危機が永続することは、もちろん、帝国主義国の民主主義体制の経済基盤も崩壊しつつある。

こうして経済の近代化↓経済安定↓民主主義体制内への階級闘争の封じこめ、という路線はもはやありえず、結局帝国主義の軍事どう喝体制の強化にゆかざるをえないのである。

□第二に確認しうることは、アジア危機の拡大深化にもなつて帝国主義の軍事どう喝体制の戦線も拡大することだ。

その場合、アジアにおける帝国主義の軍事どう喝体制の主要目標は中国である。ソ連が米帝の核ミサイルどう喝体制に全面屈服しているからである。中国における毛・林体制の確立も対中国軍事どう喝体制の強化に拍車をかける。

つぎにすでにみたような世界経済危機と帝国主義国の階級的危機は、帝国主義国（日本）プロレタリアートにたいする軍事的警察的どう喝体制の強化をあらたに帝国主義権力に要請している。

さいごに、ベトナム・インドネシア・韓国・パキスタン

三、激化するアジア危機と沖縄・安保

こうしていまやベトナム政策の破綻——ベトナム和平交渉——韓国大空輸作戦、という米帝の一連の動向が何を意味するか明らかにした。すなわちそれは、世界階級闘争にたいする世界的軍事どう喝体制が、まずベトナム・東アジアにおいてその無力性を暴露し、全面的再編成をせまられている、という事態である。

それが単にベトナム政策の破綻にとどまらず、世界的普遍性をもっている（世界階級闘争にたいする帝国主義の世界的軍事どう喝体制の破綻）というのは、ベトナム・アジア危機が、はじめにみたように、世界経済危機の開始、帝国主義国階級闘争の革命闘争への転化、過渡期国家階級闘争の激化、という世界危機の一環として存在するからである。

それではこうした帝国主義の軍事どう喝体制の破綻と再編成は、日本帝国主義と日本プロレタリアートに何をつきつけるか。

（一）第一に確認しうることは、帝国主義はその軍事どう喝体制の破綻にたいしておなじく軍事どう喝体制の手をおし、強化をもつて対処するほかない、ということである。

帝国主義は、歴史上一度も後進諸国の経済的安定を保証

・インド等拡大する後進国人民の反乱戦線にたいするよりいつそうの軍事どう喝体制の強化である。

（二）こうして世界帝国主義のアジアにおける軍事どう喝体制の再編は、日本帝国主義にたいしてつぎのような問題をつきつけている。

第一に、中国に対する核ミサイルどう喝体制の強化であり、そのカナメは沖縄核基地の堅持と自衛隊の核武装化である。

第二に、日本—韓国—台湾という東アジアの中国および後進諸国階級闘争にたいする通常兵器体系で武装された局地戦用地上軍の強化であり、そのカナメは、日帝による軍事費の肩がわり、自衛隊の増強、海外派兵体制の確立である。

第三に、帝国主義国（日本）階級闘争にたいする軍事警察どう喝体制の強化であり、そのカナメは、官僚執行権力独裁体制の強化と警察機動隊および自衛隊の内乱鎮圧部隊の強化である。

（四）以上のような帝国主義の軍事どう喝体制再編のなかで、日米両帝国主義の関係である日米安保体制もまたあらたな意義を獲得する。

第一に確認しうることは、米帝の軍事どう喝体制の一環に日帝が組みこまれるという従来からの結合関係がより強化されることである。

米軍が核戦略軍、自衛隊が対局地戦の地上軍という従来の分業関係は、実際には（ベトナム派兵もできず）空文句に終っている。愛知外相が沖繩返還交渉にもちだそうとしている「自主防衛強化」「GNPの二割五兆円の四次防（三次防は〇・九五割）」「沖繩の自衛隊による防衛」などは、これまで空文句に終っていた軍事どう喝体制の日帝の分担を実質化するというものである。

第二に、世界経済危機の激化の中で、日帝の経済的対米依存関係はますます深まり、この面からも米軍事どう喝体制と日帝の結合はふかまることである。

第三に、日本プロレタリアートの階級闘争の高揚にたいするブルジョアジーの軍事どう喝体制として、日米安保体制がたちあらわれつつあることである。「安保繁栄論」「安保か混乱か」というどう喝は、日本ブルジョアジーもまた、経済成長をバックにした懐柔体制内化路線から、ベトナム人民にたいする米帝の対応と同じく、日本プロレタリアートにたいする軍事どう喝路線に転換しつつあることを意味しており、その軍事どう喝には、核ミサイルからゲリラ戦部隊にいたる米帝のすべての軍事力が動員されることはあきらかだからである。

四沖繩・安保闘争は、以上のような日米帝国主義のアジアにおける軍事どう喝体制（しかも、破綻、再編成をよぎなくされている軍事どう喝体制）全体にたいする闘争であ

ることを、われわれは確認しなければならない。

青年共産同盟結成宣言

一、共産主義

（一）われわれの任務と目標は、帝国主義権力の打倒、プロレタリア独裁権力の樹立、そして、世界共産主義社会の建設である。

この闘いの主力軍は労働者階級である。労働者階級を主力軍とする広範な被抑圧勤労人民の力によつてはじめて、この闘いに勝利することができる。

資本主義社会にあつて、その直接生産者である労働者階級は一切の生産手段から切り離され、ただ自らの労働力を日々売り渡すことによつてのみ生存しうる階級である。

これに対して、非生産者である資本家階級は生産手段を私有し、労働者に剰余労働を強制し搾取している一部の支配階級である。

ブルジョア国家は、この私有財産的法秩序の暴力的維持機関として存在している。それは、全国的に組織された官僚・警察・軍隊など中央集権的官僚執行権力である。そし

て、それは、歴史上はじめて経済過程の個別的搾取関係から離れた「国民的」形式をもつたところの暴力組織である。こうして資本主義社会は、最も純化された最後の階級社会であり、ブルジョア国家権力は究極的な階級国家の形態をなしている。

（二）それゆえ、かかるブルジョア国家権力を打倒し資本主義社会の階級関係を廃絶することは、一切の階級的支配と搾取とを止揚することに他ならない。社会的労働生産の主体者である労働者階級自身が社会の主体となることによつてあらゆる普遍的人間の解放が実現されるからである。

そうして実現される共産主義社会こそ、社会の一員としての各人が自らの力に応じて労働力を社会に提供し必要に応じて生産物を取得する社会である。またこの共産主義原則は社会自身の責任において、計画的かつ意識的に保障されるものである。

（三）ブルジョア国家権力の打倒・プロレタリア独裁の樹立から、こうした共産主義社会の実現に至るまでの全過程が、いわゆる「過渡期社会」である。

われわれの任務は、ブルジョア国家権力の打倒資本家階級の廃絶にとどまらず、同時にこの過渡期社会における資本主義社会の残滓を粉砕すること、不断に資本主義的雇用制度や資本主義的分配への傾斜と依存またそれを基礎とする反革命勢力の策動と闘いぬくこと、この闘いをおして真の共産主義社会の実現をもちとること、にある。

二、世界革命と日本革命

現在、資本主義世界は、その歴史上第四の世界危機を迎え破局につき進んでいる。

ロシア革命をもたらした第一次大戦とその戦後危機、相対的安定期の破綻とドイツを中心とした三〇年代の世界危機、そして今、四たび資本主義は戦後世界大戦の破綻をおしてプロレタリア世界革命の歴史的條件をわれわれの前に提出しているのだ。

四六八年五月フランス一〇〇万プロレタリアートはまさに「反乱」とも呼ぶべき闘いに決起した、フランス労働者階級と学生は、フランスの栄光をカサにしたド・ゴールの激しい政治的経済的攻撃に対し、六三年以来、数年間におよぶ部分的個別的抵抗をくりかえし闘ってきた。そしてついに、学生街の制圧と衝突をきっかけにたちまち全労働者階級の工場占拠ゼネストへと暴発的前進を遂げたあの

「五月革命」は、ド・ゴールの大統領執行権力独裁に対する公然たる挑戦であつた。

激化する国際競争戦の犠牲は全国的に国内労働者階級人民に転嫁され、執行権力独裁への移行とそれによる苛烈な政治経済攻撃が開始されている。

フランスの事態は、そうした先進帝国主義国階級闘争に共通した性格をもつた典型的表現にほかならなかつた。今や世界革命の主力軍であり、最終的決定力である帝国主義国プロレタリアートの闘いが世界階級闘争の前面に躍り出たのである。

この先進国労働者階級の台動に先立ち、帝国主義世界体制をゆさぶり、その矛盾を暴露し、同時に帝国主義支配の限界をも明らかにした闘いこそ、ベトナム人民を筆頭とするアジア労働者階級農民の解放闘争である。

ベトナム人民は、解放戦線を中心とする武装勢力に結集し、全人民武装を推し進め、地域的なコミューンの革命権力を樹立して一定の生産と分配の組織化を開始している。彼らは世界最強を誇るアメリカ帝国主義の軍隊に対して徹底抵抗で闘いぬき、全世界の労働者階級人民に、帝国主義支配を撃破する闘いの巨大な可能性を明らかにさした。こうした後進国労働者農民の闘いは、世界革命の力強い一翼を担うものである。

このようにして、第二次大戦の戦後革命を圧殺し構築さ

れた帝国主義世界体制は、先進国内体制の破綻とアメリカを軸とする後進国軍事支配の限界とによつて急速に崩壊への道を歩んでいる。

一九六〇年代後半に至り、過去二〇年間かつてない世界革命の条件、労働者階級と資本家階級の非和解的敵対関係が形成されてきている。これを輝しい全世界労働者階級人民の勝利に導くのか、三〇年代と同様再びファシズム反革命の支配をもたらすのか、われわれ自身の闘いにかかっている。

四六七年に入り本格的に開始された日本帝国主義の安保攻撃に対し、これと対決する実力闘争が二つの羽田闘争・エンタープライズ闘争として闘いとられた。闘いは単なるカンパニアデモではなく、実力による街頭制圧闘争へと次第に転化していったのである。そして六八年新宿米タン闘争は、駅占拠・街頭制圧闘争の連続的展開の可能性を実証し、国家権力のむき出しの本質を大衆的に暴露し、かつ、その限界をも明白なものとした。

これは明らかに六八年五月のフランスにおける学生街連統制圧、工場占拠闘争と基本的に同じ性格を示すものである。事実、大学はすでに日大・東大など大規模な学園占拠闘争に突入しており、職場における実力闘争も個々別々ではあるが顕在化している。また新宿闘争自身がまさに数万人の労働者、青年、学生の力でかちとられたものにほかなら

ない。日本階級闘争は安保をめぐる闘いを軸にして新しい段階を迎えている。

第二次大戦と一九四一五二年の激動期を経て成立した戦後体制は、組合主義的労働運動を基礎にしたブルジョア議会制民主主義体制であつた。日本帝国主義支配階級は、ブルジョア議会主義、ブルジョア平和主義を結集政策として掲げ、労働運動、政治闘争を体制内化する攻撃を五〇年代後半から六〇年代初頭にかけて連続的に展開した。六〇年安保直後の池田・江田時代はその頂点であつた。

だが、六三年アメリカの利子平衡税実施など、ドル危機と国際競争戦の激化をきっかけにして、日本帝国主義は労働者人民に対する新たな抑圧攻撃と搾取強化に乗り出した。六五年日韓条約の強行批准、六四年春闘がその転換点である。彼らは旧来の体制内化機構の再編に着手し、官僚執行権力独裁への移行を開始した。それと共に彼らのイデオロギー政策も、ブルジョア民主主義・自由主義陣営平和論ではなく、国権主義・大国主義へと転換した。さらに最近では、相次ぐ大衆的実力基地闘争、学園占拠闘争の高揚に直面して、執行権力の「秩序維持」の力の行使を認めるか、否か、といったどう喝政策を加えつつある。

こうして政治的経済的イデオロギー的諸攻撃が七〇年安保に向つて集約強化されてきている。

他方同じく戦後政治体制の中にあつて、議会内反対派。

組合主義労働運動指導部として存在してきた、日本共産党は、執行権力独裁の強行的路線の前に屈服を重ね、実力闘争に敵対し、客観的にはむしろ安保体制内の反対派、その補足物へと転落している。日本共産党は、本格的秩序党として、秩序の暴力的維持に狂奔している。すでに各大学の学園闘争では右翼集団と共にバリケード破壊の急先鋒となっているのだ。

そして、先に述べたように、六七年羽田闘争から六八年新宿占拠闘争に至る過程を通して、街頭制圧・地区占拠闘争、学園占拠・職場実力闘争を闘いぬいてきた下からの大衆の実力闘争を担う部隊が明らかに一つの社会的勢力を形成してきている。

このようにして、世界危機の開始の時代にあつて、日本階級闘争は

「安保攻撃とどう喝政策を軸に政治的経済的直接攻撃に乗り出しつつある帝国主義支配階級とその執行権力独裁」と

「攻撃とどう喝に屈し、安保内反対派の地位に安住の地を求め、秩序維持勢力に転落した社会党・民同、日本共産党『民青』そして

「それらの指導部の議会的組合的統制をのりこえて学園占拠・職場占拠、街頭制圧闘争に立ち上りつつある労働者学生人民」

労働組合そのものの空洞化をつくりだした。さらに街頭制圧闘争、職場実力闘争の発展と労働者階級の新たな流動化に直面し、彼ら組合主義官僚は秩序派の一方の旗頭として労働運動を体制内におしこめる巨大なしつこく物となつて

いる。

他方学生自治会も、戦後、ポツダム自治会と呼ばれる全員加盟制自治会として結成されて以来、ほぼ労働運動における労働組合と同じ経過を経て学生の基本的結集組織となつてきた。

だが学生自治会の場合にはいくつかの特殊な点をもっている。まず五〇年代後半からの学生数の急膨張は学生の大半を労働者予備軍としての集団に化したこと、また職場における職制などの執行権力や既成指導部が存在しないことなどである。これらの条件の上に、従来の大学制度全体の再編を狙う帝国主義支配階級教育学園攻撃のさ中にあつて、現在大規模で爆発的な学園反乱闘争が闘われている。そして、既存の大学秩序、大学自治Ⅱ教授会自治論などを吹き飛ばし、闘いは同時に、単なる自治会的ワクにとどまれない性格をもつてきている。

したがつて、たしかに労働組合や、学生自治会は大半の労働者・学生を結集しており、われわれはそれらを階級的に強化する任務をもっている。

だが闘いの大規模な流動化、組合官僚の職制Ⅱ資本との

という三つの力の対抗が煮つまりつつある。そして、当面安保を軸とする闘いをめぐつてこれらの対立は激化を開始しており、ブルジョア国家権力打倒・労働者権力樹立の革命闘争を提起する条件を形成しはじめている。

三、われわれの基本任務

出現在、われわれが闘いを組織する主要な場の一つは労働組合であり、学生自治会である。

日本階級闘争においては、第二次大戦後はじめて、大規模に労働組合が登場した。非惨な戦後インフレと旧「大日本帝国」崩壊という状況の下で登場した組合は、結成と同時にストライキ・生産管理闘争に突入しストライキ闘争組織実力闘争組織としての性格を強くもつていた。

だが「戦後革命」の挫折をとおして次第に労働運動の体制内化が進められ、総評を頂点とする労働組合指導部はほぼ社民的組合主義者の手に握られたのである。そして議会议民主主義支配体制を支えたこの組合主義労働運動は、五〇年代後半からの日本資本主義のいわゆる高度成長時代の中で定着化し、組合は取引き機関としての性格に傾斜した。

そして、六五年以降のブルジョア執行権力独裁の開始と共に、総評組合指導部の妥協路線は手詰り、屈服を重ねて

癒着、学生自治会内部における右翼集団の政治的登場や日共Ⅱ民青派の秩序維持暴力路線への転換、そして労働組合・学生自治会の空洞化と分解の促進が急速に開始されている今日、単なる組合、自治会機関にだけ依拠した闘いはすでに十分な対応が不可能であることを明らかにしている。

四六七年十月の羽田闘争以来、佐世保、王子、成田、三里塚闘争など大衆の実力基地闘争の全国的発展の中で、数限りない大衆的行動団体や自主的闘争組織が地域につくり出された。

また大規模な大学占拠で闘っている学園闘争では、学部別・学年別闘争会議やストライキ委員会、先進的サークルなどに直接基礎をおいた「共闘会議」などの組織がつくり出されている。

基本的には労働組合においても同様であり、職場闘争の中から各種の臨時闘争組織・青年行動隊などが組織されている。

これらの組織は先進的大衆の結集組織であると同時に臨時の決議機関、執行機関としても機能している。

こうした地域、職場、学園における自主的闘争組織、大衆的行動委員会が闘いの発展とともにますます重要な位置を占めてきている。職場・学園占拠闘争の長期的展開、街頭制圧闘争の連続的貫徹という新たな闘争形態が文字通り保障されるためには、もはや旧来からの組合・自治会の執

行部だけでは全く不十分だからだ。それは自主的闘争組織・大衆的行動委員会の大規模な建設とその下への大衆的に結集した力があつてはじめて可能となる。

また闘争の質的な新しい段階を示す大衆的実力占拠闘争は、ブルジョア政治社会制度を打破り新たな労働者学生秩序をつくりだす第一歩である。いいかえれば、労働者ソヴエト権力―またその一翼としての学生ソヴエト権力―を樹立する萌芽が、この大衆的実力占拠闘争の中にあり自主的闘争組織・大衆的行動委員会などはその萌芽形態にほかならない。

われわれ青年共産同盟は、それゆえ、これらの組織を目的意識的につくり出し、さらに強化発展させるために、自らその共産主義的中核として活動する任務を果さなければならぬ。

仇われわれ青年共産同盟は以上の確認にふまえて組合学生自治会、サークルなどの中心的指導的役割を積極的に担うこと、そして、同時に、自主的闘争組織、大衆的行動委員会を組織し、支え、指導すること、この二つの指導の有機的結合をもつて職場学園占拠闘争、街頭制圧闘争を闘いぬくことを自らの任務とする。

そして、われわれは、それらの闘争をとおして、安保粉砕の工場学園占拠ゼネストをかちとり、プロレタリア日本革命の実現を追求し、全世界にプロレタリア独裁権力をう

とくに日本では青年労働者の労働者階級に占める地位は大きい。それは、総労働人口の三十数%を占め、しかもそのほかに、一五〇万にのぼる大学生と四百数十万もの高校生がひしめいている。青年は労働者階級の主要な担い手と隠大な予備軍とを構成している。

われわれは、労働戦線、学生戦線、あらゆる地点で全労働者階級の解放とわれわれの未来のために最も献身的に闘おうではないか。

全国の青年諸君！

世界の青年と団結して、職場に、工場に、地域に、学園に青年共産同盟を建設しよう！

全国すみずみに青年共産同盟の旗をうちたてよう！

革命的青年労働者、学生は青年共産同盟に結集しよう！

ちたて、世界共産主義社会の実現にむけて闘うことを任務とする。

また激動の時代は、新しい闘争形態・新しい組織形態を要求するだけではない。それは、すべての政治指導部を厳格なふるいにかけていく。

すでにバリケードの反対側に立ち、安保安攻撃に對し安保体制内反対派に逃げて秩序維持派を形成し登場してきている社会党・総評幹部、日本共産党Ⅱ民青指導部。この路線を粉砕しつくすことは、今やわれわれにとつて不可欠の任務である。

同時にまた、共同闘争の前進をはばみ、セクト的利益や立場によつて闘いの分断をもたらし諸グループに對してもわれわれは断固たる原則的闘いを貫徹しなければならぬ。青年共産同盟は、これらの任務を果すために真に科学的な理論の学習を不断に追求する。できあいの古びた知識にしがみつくのではなく、青年の力強い活動の主要な一環として、マルクス・レーニン主義の革命的蘇生と発展をかちとることが任務である。

青年共産同盟はこうした学習や実践的行動をとおして青年労働者や学生の団結をつくり出していく青年の自主的、大衆的な政治組織である。

われわれ青年は闘いのあらゆる戦線において最先頭に立たなければならぬ。

規約

第一章 同盟の目的と組織

第一条

〔一〕青年共産同盟は、ブルジョア国家権力の打倒・プロレタリア独裁権力の樹立、世界共産主義社会の実現をめざす共産主義的青年的大衆的政治組織である。

〔二〕同盟は、労働者階級全体の世界的利益を代表し、同盟のあらゆる機関と組織においてその任務を遂行する。

第二条

〔一〕同盟の基礎組織は支部である。

工場、職場、地域、学園で三名以上の同盟員をもつて支部をつくる。

〔二〕支部は必ず定期的に支部総会を開催する。また、支部同盟員の三分の一以上の要求があつたとき臨時支部総会がひらかれなければならない。

〔三〕支部総会は、支部キャップを選出しなければならない。必要な部局（機関紙・財政・教宣など）をつくり、必要な場合には支部委員会を選出する。支部委員会は支部総会を招集することができ、支部全体の指導にあたる。

四支部は、同盟員の活動の場において班をつくる。

第三条

(一) 同盟は都道府県ごとに、都道府県大会をひらく。

(二) 都道府県大会は、都道府県委員会を選出する。

(三) 都道府県委員会は、キャップを互選し、必要な部局（機関紙、財政、教宣、労働戦線、学生戦線など）をつくる
ただしこれは、都道府県大会で承認されなければならない。

四都道府県委員会は必要ときに都道府県大会を招集する
また所屬支部の三分の一以上の要請があつたとき、招集
しなければならない。

五都道府県委員会は、必要な場合、地区委員会をもうける
ことができる。

第四条

(一) 同盟の最高決定機関は全国大会である。

(二) 全国大会は、年一回定期的に開催する。

(三) 全国大会は中央委員会と中央機関紙編集委員会を選出する。

四全国大会は規約の改正、解釈権をもつ。

五中央委員会の決定および三分の一以上の府県委員会の要
請があつたとき、臨時全国大会がひらかれる。

六中央委員会は大会と大会とのあいだにおける同盟の最高
機関であり、大会決定の実行、および、細目の決定をお

七同盟費をただしくおさめる。

第三章 同盟員の資格

第六条

(一) 結成宣言と規約を認め、実行する意志をもつすべての青年は同盟員となることができる。

(二) 同盟への参加は二名の同盟員のすいせんにより、各支部の承認で決定される。支部は加盟者を都道府県委員会と中央委員会に報告し確認をうける。

(三) 同盟費の納入は資格の基準となる。同盟員は原則として月一〇〇円の同盟費を納める。うち支部活動費として五〇円、上納費として五〇円をあてる。

四同盟の品位をいちぢるしく傷つけ、規約を守らない同盟員は処分される。

各支部は慎重に検討したうえ、右の同盟員にたいして、除名、権利停止、警告を決議する。ただし、これはただちに都道府県委員会・中央委員会に報告され承認をうけなければならない。また被処分者は大会にいたるまでの同盟の各級機関に異議を申し立てることができる。
中央委員の処分は大会でおこなわれるが、やむをえないときには、中央委員会の三分の二以上によつて決議し大会で承認をうけることができる。

こなる。

五中央執行委員会は、委員長、副委員長、および必要ときに書記長をえらぶ。

六中央委員会は、同盟の中央財政を管理する。

七中央委員会は、その他必要な部局をつくることができる

第二章 同盟員の任務

第五条

同盟員はつぎのような任務をもっている。

(一) 自らの献身的行動と発言によつて、青年共産同盟の目的をたえず表現し大衆の信頼を獲得しなければならない
(二) あらゆる実践活動の先頭に立ち、主動性と創意性を發揮
しなければならない。

(三) 共産主義的青年にふさわしい真のマルクス・レーニン主義を学ぶこと。

四規約を守り、所屬する会議に出席し、決定に参加し、それを実行する。

五同盟中央組織の指導や支部・班の活動に疑問のあるときは、すすんで組織に明らかにし討論していく。

六同盟員はたがいの活動を援助しあい団結をふかめる。

七中央機関紙を検討し、すべての青年のなかにそれをひろめる。

都道府県委員の処分もこれに準ずる。

付 則

①各組織の決定は原則として一般に組織の過半数が出席し出席者の過半数をもつて行う。

②大会代議員等の規定は別に定める。

高校生諸君に訴える

一、高校生叛乱が開始されたノ

全国の高校生諸君ノ

いまや全国いたるところで、高校生叛乱ののろしがあがつている。学校権力の不当処分や校務分掌任命制に反対する校長室占拠、お仕着せ卒業式粉砕闘争等、叛乱は急速に全国化している。

こうした現時点の高校生叛乱の特長は何か？

第一に、校長室占拠や卒業式粉砕闘争にみられるように、現在の学校秩序そのものについて疑問の目を向け、これを否定し、反逆する闘いに起ち上つてきていることだ。

このことは当然のことながら、高校生の闘いが独自の闘争として始まったこと、学生運動の第二戦線や市民の一部として政治カンパニアに参加するにとどまらず、自らの解放を自らの闘いでかちとる闘争へと、第一步をふみだしたということだ。これが第二の特長だ。

第三に、今日の高校生叛乱の端緒的開始は、いうまでもなく、六七年の二つの羽田闘争から佐世保、王子、成田をへて六八年一〇・二一新宿にいたる一連の基地闘争Ⅱ地区

占拠・街頭制圧闘争の高揚と、東大・日大を頂点として、まなお永続する学園占拠闘争の高揚から、直接の衝撃をうけていることだ。高校生叛乱は、学生・青年労働者の基地闘争、学園占拠闘争と、本質的に連帯した闘いだ。

こうした高校生叛乱の特長は、何に由来するか。それは第一に、高校生五〇〇万にたいする日本帝国主義の直接攻撃であり、第二に、いまや高校生攻撃にたいして抵抗し反撃しうるのは、唯一高校生自らの闘いだけである、という歴史的現実だ。

二、日帝の高校生攻撃は激化するノ

全国の高校生諸君ノ

資本と国家権力の高校生攻撃は、一方における国家主義イデオロギーの注入と、他方における高校の「労働力商品」の大量かつ効率的生産機構「化」を二本の柱として激化している。

「期待される人間像」(一九六五年の中教審答申)から始まり、六七年の佐藤訪米後の「国を守る気概・愛国心」の注入、として急速に前面におしだされた「国防教育」「愛国心教育」の攻撃は、教科書や教師の国家統制をとまないつつ、ますます激化している。戦後「民主教育」の中心にすえられた「反戦・民主主義」がかけをひそめただけで

なく、帝国主義戦争の美化、自衛隊の積極的肯定、神話の持込と天皇の權威の再強調、ストライキ罪惡論等の注入が行われつつある。

他方、高校教育を労働力商品の効率的生産の場とする攻撃が「多様化」の名のもとに音をたてて進行している。中学を「観察過程」とし、高校教育を適性、能力、進路、環境にに応じて「多様化」する(中教審、後期中等教育についての答申)とは、実は、生徒を「人的資源」の観点から中卒Ⅱ最下層労働者、職業科、非進学コースⅡ下層労働者、進学コースⅡ大学卒の中下層労働者へとできるだけ早期に手ざよく分類し、それぞれの種類の労働力商品に見合った「教育」という加工をほどこすことにはかならない。

高校生は、資本の設定したこうしたふるいわけ試験によって部分的、奇形的に能力を発達させること、そして他の生徒を連帯の対象としてではなく、追いつくとす敵として見られることを強いられる。

そしてこうした非入間的な高校教育とその下への生徒支配に疑問をいだき、反逆する高校生に対しては「高校生の政治活動の禁止」なる強権的学園支配をもつて権力と資本はのぞんでいる。

こうしたナショナリズム教育と差別的労働力商品化の攻撃は五〇年代以降の反動的文教政策―戦後のアメリカ占領軍によって日本のブルジョワ支配階級におしつけられた

教育民主化に対する反動的巻きかえし政策―の単純な延長ではない。

それは激化する世界危機と日本の戦後民主主義体制の動揺がブルジョワ支配階級をして、国内労働者人民への政治経済的攻撃の強化と官僚執行権力独裁の傾斜へとかりたてており、また、それに伴って日本のブルジョワ支配階級の国民結集政策が議会主義的、経済的結集政策から国家主義的国権的結集政策へと移行しているからである。日帝の今日の高校学園支配強化は、こうした国内労働者人民への政治的経済的攻撃と新たな国民結集政策の一環としてでてきているのだ。

三、これとどう闘うか

こうした資本と国家権力の高校学園攻撃にたいするただ一つの反撃の砦は高校生自らの闘いだ。

第二次大戦後、アメリカ占領軍は日本ブルジョワジーに教育の民主化をおしつけた。軍部と内務官僚の教育支配体制は解体され、公選制教育委員会と現場教師―教職員組合―の手に生徒と教育は委ねられた。文部省は「助言者」の地位にあまんじた。ここでは教育労働者は―米占領政策の「非軍事化」から「反共基地化」への転換にともなつて、政令二〇一号によりスト権を剝奪され、その闘争は体制内

化されていたといえ—教育現場—生徒に対する国家権力の攻撃に対して防波堤の役割を果たしていた。

サンフランシスコ条約によつて米帝権力が補佐的地位に退き、日本ブルジョワジーが自ら国家権力を掌握するや資本と国家権力による学園に対する直接支配をめざす攻撃が開始された。教育委員会公選制の廃止と学校管理規則（一九五六年）、勤評（一九五八）の攻撃がそれだ。こうして学園秩序は教職員の手から文部省—任命制教委—校長—教頭、という系列、すなわち 国家権力とその末端機構である学園職制（校長・教頭）の手中へと、ほとんど移行してしまつた。こうして今や高校生徒は、資本と国家権力の学園攻撃のまえに、無防備のままさらされることになつた。六〇年代に入つて、高度成長のゆきづまりと戦後民主主義体制の動揺に直面した資本と国家権力は、教育の国家主義的帝国主義的改編攻撃へとかりたてられた。

たか同時に、権力の学園攻撃に対する高校生の闘いと反逆の闘いが、学力テスト反対闘争（一九六一年）を突破口に始まつた。

以上のことから次のことが確認できる。

第一に、五〇年代教育現場—学園の直接支配体制を築いた国家権力は、いまや、教育の国家主義的帝国主義的再編の攻撃を、かつてなくきびしく高校生の頭上にうちおろそうとしている。

第二に、戦後まがりなりにも学園秩序を掌握し、民主教育の担い手となつた教職員は、国家権力の一貫した攻撃の前につぎに敗北をかさね、不本意ながらにせよ、国家権力の高校生攻撃と生徒支配の道具となつてゐる。従つて、第三にいまや、資本と国家権力の高校生攻撃に対する反撃の砦は、高校生自らの抵抗と反逆の闘争以外にない。

四、全国高校生反乱へ

全国の高校生諸君！資本と国家権力の激化する高校学園攻撃に対し諸君自らの抵抗と反逆の闘いに起て！

学園自己権力をめざす高校生の反乱闘争は、同じくブルジョワ学園秩序の解体と学生自己権力（学生ソウイェト）の形成をめざす大学生の闘争や、地区占拠・街頭制圧闘争工場・職場でプロレタリア自己秩序の形成をめざす職場・工場の反乱闘争と固く連帯し安保セネストの一翼を構成するだろう。そのために全ての高校に卒業式粉碎、入学式粉碎、反動的学校規則撤廃等の闘争のための行動委員会をつくる。行動委員会の先進的闘争によりブルジョワ学園秩序に対して大衆的拒否の運動を創りだそう！

学園占拠、街頭制圧、工場占拠の安保セネストに向けて、高校生反乱を拡大せよ！

青年共産同盟の当面の任務

革命的青年労働者学生諸君！闘う同志諸君！

われわれは今、歴史の偉大な局面に立っている。全世界の労働者人民の、圧政と収奪に対する憎しみと怒りの鉄火の前に、資本主義世界は歴史的破局を開始している。

ベトナム人民の革命的解放戦争、フランス労働者階級・学生の工場占拠セネスト闘争、日本の一〇・二一新宿闘争、日大、東大の長期学園占拠闘争など、六七—六九年にかけての諸闘争は、大戦後二十年間の帝国主義世界体制の矛盾とその限界を鋭く暴露した。全世界の労働者人民が、自らの手で新しい社会を建設する勝利の闘いに向け、さらに前進するための歴史的條件は次第に成熟しつつある。

その闘いの最前線に起つものこそ、われわれ青年でなければならぬ。革命的青年労働者学生諸君！闘う同志諸君！われわれは青年共産同盟結成大会への呼びかけを、固い連帯の熱情をこめて送りとどけたい。

全世界の青年よ団結せよ！闘いの先頭に起て！
青年共産同盟を全ての工場・職場・学園・地域に建設しよう！

全国の闘う青年労働者・学生諸君！

われわれは昨年十二月、「青年共産同盟」結成のために全国の同志諸君の下に「訴え」を発した。

その内容はおよそ次のとおりであつた。

第一に、それは、資本主義世界の歴史的破局の時代にあ

つて、われわれの原則的任務と目標—すなわち帝国主義権力の代倒とプロレタリア独裁権力の樹立、世界共産主義社会の建設—を宣言した。そして、この闘いの主力軍—労働者階級のソウイェト権力を中心とし、全人民の力によつてあらゆる搾取と収奪、支配と強制からの究極的解放をめざ

す闘いの配置につくことを訴えた。

第二に、それは、われわれが現在直面している革命的危機の性格を明確にした。―第二次大戦後の世界体制の経済的・政治的崩壊の開始。すなわち六八年三月のドル・金兌換の事実上の停止をはじめとする帝国主義の世界危機の開始。またフランスを筆頭とする先進国ヨーロッパ階級闘争の急進展。ブルジョア階級の工場占拠ゼネスト、およびベトナムをはじめとする後進国アジア階級闘争の徹底抗戦。農民の武力抵抗による解放区闘争といった全世界の労働者人民による帝国主義支配体制への挑戦等。

第三に、それは、そうした戦線の一環としての日本階級闘争が「安保」を焦点として新段階に突入したことを宣言した。―街頭制圧闘争と学園占拠闘争の相互促進的発展。学園闘争の大衆的反乱闘争への転化。そして、「強化された」つづあるブルジョア執行権力独裁」と「体制秩序派としての社会党・民同指導部、および日本共産党」と「学園・職場・工場占拠・街頭制圧闘争に起ちあがりつつある労働者階級人民」の三つの力の関係がにつまりつつあることを明確化した。

第四に、それは、以上述べた階級情勢に対する認識を前提にして、われわれの基本任務を設定した。―既存の大衆組織である労働組合、学生自治会は、それ自身の矛盾的性格を暴露し分解を開始しており、他方地域、学園、職場に

進・公労協下部労働者の組合突上げ闘争のよび組合の枠を越えた横断的組織の進展等々。

この間の情勢の推移と主体的活動の前進は、ますます青年共産同盟の結成と強化が必要なることを告げている。とりわけ学園占拠闘争における「共闘会議」運動の全国的波及未組織労働者の闘いにおける「合同労組」運動の成果、等の大衆闘争組織の発展、およびそこにおける、「行動委員会」との区別と関連等、従来必ずしも明確でなかつた点の克服、そしてそれらの共産主義的中核としての青年同盟の任務の具体的確定―こうした点を結成大会で明らかにし、今後の激しい階級闘争を真に担う青年共産同盟を登場させようではないか！

まず最初に、われわれは六九年一月―七月に焦点を合わせて日本階級闘争の展開過程を総括しておかなければならない。

この間の第一の特長は、日本帝国主義国家権力が学園総攻撃を開始したことである。

一月一八―一九日、空前の弾圧体制（八五〇名の機動隊、ヘリコプター・ガス銃・催涙液・本郷―神田の戒厳体制等）とこれまた空前の逮捕者、負傷者をもつて行なわれた東大闘争への攻撃こそ、その学園総攻撃の突破口であった。事実、それ以降、学園占拠闘争のもう一つの拠点―日大闘争への攻撃を開始した。一月二九日生産工学部のハ

は無数の自主的闘争組織、大衆的行動団体が登場してきている。

従って、青年共産同盟の当面の任務は、占拠闘争を押し進める中で、この二つの組織に対する指導を有機的に結合しつつ、しだいに後者に運動のヘゲモニーを移行し、それを工場・学園・職場ソウイェトにまで発展させることである。

そのために、ブルジョア秩序の維持派―バリケード破壊の社民・日共との非妥協的闘争を展開すること。同時に、セクト的立場主義による闘いの分断と敗北に導く諸派との原則的闘争の貫徹。

自らの理論学習活動の重視と推進。独自の宣伝活動の開始。

要約すると、ほぼ諸点が、昨年十二月に発表した「訴え」の内であった。

だが六九年に入つて、階級情勢はさらに進展した。―学園占拠闘争に対する国家権力の暴力的介入。沖縄における二・四ゼネスト中止と「返還」運動内部の対立激化・フランスゼネストとフラン危機の再燃。アメリカ・ニクソン政権の登場と対外・国内新政策の施行開始、等々。

そして、われわれ自身も、学園階級闘争の攻防戦をとおして「安保粉砕共闘」を登場させ、自らの影響力を飛躍的に強化してきた。同時に、下層、未組織労働者の闘いの前

リケード撤去を皮切りに、国家権力は、日大の全学部に対して連続攻撃を加えていった。そして、さらに、中大、野大、京大、教育大、外国語大など一斉に占拠闘争への暴力的破壊が突き進んだ。

こうした日本帝国主義の学園総攻撃がもつ政治的背景は、いったい何であつたのだろうか。

そのことを明確にするためには、われわれは六八年の階級闘争をふりかえつて総括する必要がある。

一つは、言うまでもなく、東大、日大を軸とする学園占拠、長期ハリケード闘争の構築である。

六八年階級闘争が切り開き到達した地点はつぎの二点に集約できるだろう。

そして、他の一つは、六七年十月―十一月の羽田闘争、六八年一月―三月の佐世保―王子野戦病院―成田闘争などを直接ひきつづき闘いとして爆発的に闘われた十・二一新宿闘争であつた。

前者の学園占拠闘争は、日大の古田体制打倒、東大における医学部、文学部処分撤回などの要求を掲げて闘いが開始された。だが日本帝国主義の教育学園攻撃は戦後帝国主義世界体制の動揺とそこからくる日本の戦後民主主義の動揺と官僚執行権力独裁への傾斜につきうかされて(1)教育内容の国家統制(2)マスプロ教育による学生の大衆な労働力商品化(3)国家財政、私学資本による学生からの収奪、(4)学

生自治活動の弾圧などが激化している。しかもこれらの攻撃は、大学内部の「右翼集団」や教授会の特権的自治と官僚的権威で支えられてきたのである。それゆえ、ひとたび闘争の戦端が開かれ、全学に波及し、右翼・教授会秩序を打ち破る占拠闘争に発展するや、全大衆的結集と大学のブルジョア秩序そのものとの対決につき進まざるを得ない必然性をもつていたのである。

だが学園占拠闘争がつきつた問題は、だんにそれが大学内部のブルジョア秩序を破壊したという点にだけあつたのではない。六八年階級闘争の提起した第三の点Ⅱ新宿制庄闘争の爆発的昂揚は実は、日大、東大を頂点とした学園占拠闘争なくしてはあり得なかつた。十・二一新宿闘争は、決して、砂川、羽田以降佐世保、王子、成田と連続した基地撤去、安保闘争が六八年六月をもつて一頓座し、とくに新左翼各派のセクト的闘いによつて発展の芽が開かれつつあったときに、日大、東大等学園占拠の大衆的闘争が開かれ、それを基礎にしてはじめて、十・八・十・二一の新宿制庄闘争が可能となつたのである。

新宿駅から街頭にかけて結集した数万人の大衆の実力闘争は従来のすべての街頭闘争のイメージをかきかえるものであつた。「米軍タンク車輸送阻止」を直接の要求として闘われたこの闘争は、国家権力が社会党、総評の集会をも禁止し、騒乱罪適用を予告する等、徹底したどうかつ攻撃を加

焦点は、第一に、学園占拠をつき崩すこと。そして第二に沖繩、成田、砂川基地周辺における実力基地闘争への攻撃に移ることである。

こうして安保階級闘争への総攻撃の突破口としての学園占拠闘争への連続攻撃が開始されたのである。逆に問題を主体的に捉えなれば、七〇年安保に至る全過程の中から安保紛争、工場・職場・学園占拠セネストへの体制を作り出すためには、敵の学園攻撃を再度の「新宿」闘争の貫徹によつて、すなわち学生の大衆的反乱の闘いをもつて、はねかえし、権力の介入をはじきだし、全国学園総反乱への波及、沖繩はじめ全国各地撤去闘争への連帯を構築することを任務としなければならなかつた。

周知のように、しかしながら、学園占拠をめぐる攻防戦において、その任務の目的意識的な遂行は全く不十分なものでしかなかつたと言えるであらう。

まず、問題は東大闘争に於て問われた。

安田講堂、工学部列品館、法研をめぐる闘いを迎えるに当つて、次の二点が指摘されなければならない。

第一は、むしろ、十八・十九日以前へとりわけ昨年十二月以降に於ける闘争局面の評価と、そこに於ける全共闘運動の基本戦術に関する点である。すなわち、大河内体制の瓦解と加藤新執行部の登場の時点での団交拒否Ⅱ全学封鎖の空文句的「方針」による大衆の離散と政府ブルジョアジー

えるに及んで新宿に結集すること自体が権力の「法と秩序」に挑戦するという特殊な政治的意義をもつようになつた。そして、社会党、総評幹部が「新宿集会」の中止というさまざまな屈服を行なつたのに対し、下部の組織労働者、未組織下層労働者、学生、高校生はそれを超えて新宿に結集した。

六五年の日韓強行突破以来、執行権力独裁への傾斜を急速に開始した日本帝国主義権力の先兵Ⅱ警察機動隊一万二千が、ついに十・二一闘争の最昂揚局面において完全に無力さを暴露した。数万の密集した大衆の実力行動の前に傭兵に支えられた権力の脆さがはじめて明らかにされたのだ。すなわち、ここに街頭制庄闘争の連続的展開の可能性が現出したのである。

だが、この攻勢も組織部隊の遅刻早退の無対応によつて貫徹されないまま深夜になつて終息させられた。

そして、権力は、これをきつかけに巻かえしをはかりはじめ、街頭行動に対する徹底した鎮庄作戦と先制攻撃を展開することになつた。

以上の点を確認するならば、六九年一月からの日本帝国主義の学園総攻撃の政治的意図は明らかだ。

彼らは、昨年一〇・二一の昂揚を恐れ十一・七をはじめ街頭行動への制庄強行に転じた。

そこで七〇年を前にして、六九年に至る、彼らの攻撃の

からのどう喝によるその促進、日共民青Ⅰ右翼連合による遅れた大衆の加藤新提案への結集Ⅰこうした過程をとがし「ハリケード派の「小教革命派」への転化が当時の局面の特徴であつた。そして、また、問われていたのは、ハリケード派の「小教革命派」としての断固たる行動Ⅱ革命的独裁という基本戦術に他ならなかつた。「新提案」によつて全共闘に結集した大衆の分断をねらつた大学当局、それと呼応した右翼学生グループの組織的登場、それらの連合戦線に乗つた形で、本格的に秩序派として暴力的ハリケード破壊に向つた日共Ⅰ民青派、そして、どう喝から攻撃の体制に移行せんとしている文部省、国家権力Ⅰ以上のような配置の中で、空文句のごとき「立場主義」ではなくハリケード破壊者及び戦線を逃亡しつつある大衆に対し、断固たる行動をもつて臨み、再度、その行動をとおした大衆的結集をはかる以外になかつたことである。

だが、実際には、全部全国動員をもつて結集した十一・十二、一・九、一・十五などの闘争はいづれも日共民青との闘争、学園内部の階級闘争の貫徹を全セクトが怠つたし東大内部でも、スト解除の右翼連合の動きを粉砕しつくす行動をとりえなかつた。

従つて、また、第二の問題として、十八十九日の国家権力の攻撃に対する対応も極めて消極的結果をもたらさざるを得なかつたのである。

すなわち、対右翼、日共民青との実力闘争の貫徹をおし
て、大衆を再結集しつつ、権力との攻防戦を行うことか残
された任務であつた。バリケードは、まさに大衆武装のた
めの武器でなければならぬ。これに対し、実際にセクト指
導部が行なつたことはバリケードの物理的強化、バリケー
ド内閉じこもり主義への転落にほかならなかつた。

こうして、「新宿」で部分的（かつ自然発生的）につく
りだされた、戦闘組織と万余の大衆との結合はついに、学
園闘争の中で復活・発展しえなかつたのである。安田講堂
は、その英雄的革命的闘いの砦としての一端を示したが、
にもかかわらず、先進的労学大衆と切り離されたまま闘か
わざるを得なかつたのだ。

東大闘争に引き続く、日大バリケードの撤去及び入試粉
砕闘争、京大闘争、東京外語大、教育大等、全国学園占拠
闘争に対する国家権力の連続的個別的破壊攻撃によつて、
学園闘争は後退・余儀なくされ、学園は機動隊秩序下にお
かれてしまつてゐる。

だが、東大をはじめ、一年有余の学園闘争を担つてきた
「全共闘」運動の主体は、自らが闘い切り開いた地点の意
義を把みとり内面的にはより高い質の獲得を基礎にして、
再度の大衆的実力闘争への準備を行つてゐる。その意味で
闘う主体の質的な深化が急速に進行しているといつて過言
でないだろう。

「反戦」の場合、左翼党派間のセクト的分断からは免がれ
てゐるものの、地評内部の親組合、幹事会によつて絶えず
圧迫され、困難性を増している。

こうした「反戦青年委員会」の現状の打開は、まず、地
区反戦そのものを、むしろ地区の労働者を中心とした「行
動委員会」として位置づけ、爆発的に展開せんとする未組
織労働者の職場占拠、実力闘争を導き、合同労組の結成、
さらには、職場、工場単位の労働者大衆組織の建設を能動
的に働きかける役割を担うこと、そして組合官僚の強力な
支配下にあつては、下部の先進的労働者の産別的行動委員
会として、上部の統制、弾圧と闘いながら日本階級闘争の
鍵を握る基幹プロレタリアートの全体的反乱闘争とその反
乱組織を建設する主体的準備を担うことによつて可能とな
るだろう。

この間の労働運動の総括は、われわれに六九年階級闘争
の特徴の一つとして、未組織労働者階級の爆発的闘争の展
開とその直接的影響の下に、基幹労働組合の上部官僚と下
部労働者の亀裂の一層の拡大のあることを展望させるそれ
に対する新たな闘争戦略と組織方針を要求している。

われわれ青年同盟は、学園反乱闘争のみならず、労働戦
線においても今や自己の組織的任務を明確化し深部から組
織を打ちたてることが問われている。

すでに、みてきたように日本帝国主義国家権力の七〇年

また、それと共に、運動の多面的な拡大も進みつつある。
三月の学園闘争の一つの特徴は高校生に運動が波及したこ
とである。全国の卒業式闘争は、学園反乱の開始が高校に
おいてもその端緒についていることを意味しており、闘いの
戦列の重要な一翼を形成しつつあることを告げている。

さらに、学園反乱は、間接的な形ではあれ労働者階級の
内部にさまざまな影響を与えてきている。とくに、労組も
存在していないかわりに、強固な職制組織もない、中小、
零細企業の未組織労働者の間に、まず、「反乱」闘争の芽
ふきだしつつある。東京・大阪等のこれら中小・零細企業
の密集地では、すでに部分的にせよ職場占拠闘争の闘争形
態や、地域「合同労組」地区労働者「評議会」などの新し
い組織形態が登場している。

従来からの新左翼労働者の結集組織である「反戦青年委
員会」は、一部は、社民組合官僚の補足物として存在して
いるが、他の部分は、新左翼系労働者の「活動家組織」な
いは「左翼サークル団体」としての役割を果たしてきた。

多くの「地区反戦」は当初新左翼諸派の統一戦線「活動家
組織」として社民構改左派と連帯しつつ、社民協会派官僚
との闘争体としてあつた。だが、東京の場合、全学連のセ
クト的分裂と軌を一にして、左翼諸派内部の抗争によつて
分断化され、「党派反戦」に転落し単なるセクトの地域的
下部機構となつて急速にその生命力を失つてゐる。大阪の

攻撃は(1)昨年末からの街頭行動に対する徹底した弾圧と先
制攻撃(2)今年一月からの学園占拠闘争に対する総攻撃(3)
そして、現在成田ボーリング決戦等、全国実力基地闘争へ
の攻撃として展開されようとしている。

このような彼ら敵権力の具体的な攻撃はどういう情勢に規
定されて向けられてきているのか。

(1) 佐藤自民党政府の七〇年攻撃の性格

一般に、今日の支配階級、佐藤自民党政府の二大政治課
題として、「沖縄」と「大学」があげられる。

このことは、七〇年安保の特徴の一端を鋭く表現してい
る。すなわち、六〇年の安保改定時とは異なり、問題が単
に国会におけるあれこれの条文解釈の論議や野党対策とし
てあるのではなく、沖縄の基地撤去、米軍改打倒の実力闘
争をはじめとする全国実力基地闘争、ブルジョア秩序の一
環としての大学秩序を粉砕し街頭制圧闘争への拠点を形成
している学園占拠闘争など、現に戦後支配体制の支柱であ
る安保体制と直接対決する実力闘争が存在していることであ
る。

たしかに彼らは、七〇年安保問題を沖縄「返還」の条件
の問題にすりかえ、それを「本土並み、核なき」などと称
している。そして、それは沖縄の屋良主席・県労協幹部ら
をまきこみ、沖縄階級闘争を分断し、抑圧せんとするもの
であり、また、本土の社会党・共産党・自民党内反主流派

対策でもある。

だが、しかし、アジア階級闘争の拡大と沖繩労働者人民の実力基地撤去闘争の発展は、彼ら本土政府の困惑を越えて前進しつつある。それゆえ彼らは、アジア階級闘争に殺に血みどろとなつてゐるアメリカ帝国主義の世界政策と協調し、日米安保を一層反革命同盟の強化として再編することに着手するであらう。

彼らのもう一つの「課題」である大学問題に関しては、ハリケードの暴力的破壊を基礎に「大学治安立法」を企ててゐる。政府支配階級は、今回の連続攻撃により大量の左派学生を逮捕し、たしかに、一時的には闘いを抑圧すること成功した。だがしかし、闘いの火の手は全国に、さらには高校生までもに拡がり続けており、反乱した大学の「正常化」も到底簡単には望めないことは明らかである。彼らにとつて、もはや大学のブルジョアの秩序の維持は、従来の権力を持たない（精神的権威も地に墜ちた）教授会に、よつては不可能であり、直接に治安管理する体制が要求されてゐるのである。大学系列の再編成、学内権限の中央集権化、副学長制度の導入などの「大学改革」とともに、学生の政治活動、ストライキなどを個別の学内規則によるのではなく画一的に、直接権力を行使することによつて弾圧できる大学治安立法が新たな彼らの攻撃となつてゐる。

第三に、彼らが着手してゐる攻撃は、大幅な財政収奪の

策動であらう。すでに国会では「国鉄運賃の値上げ」が確定され、これを突破口として国家財政による大衆収奪が開始されようとしてゐる。現在、日本資本主義の唯一の活路である世界市場は、フランス、西独などの為替管理によつて縮小傾向に入つており、アメリカの輸入統制強化と二九年恐慌以来の高金利も相まつて、輸出の先行が懸念されはじめてゐる。日本の独占資本は集中合併によるカルテル価格の安定、合理化、新規設備投資による低コスト生産などこれに対処せんとしてゐるが、国際的な「超高金利時代」にあつて、金利の引き下げは不可能であり、結局、国家財政による企業負担の肩代わりが行なわれてゐる。膨大にくれ上がった財政投融資はその端的な表現であらう。労働者階級は、合理化による首切り、労働強化、低コスト生産に伴う賃金上昇の抑制で搾取され、さらに国家財政によつて収奪されるといふ二重の攻撃にさらされてゐるのだ。

以上のように日本帝国主義支配階級は、五月、三里塚のボーリング決戦、岸↓六月愛知訪米↓佐藤訪米へと基地実力闘争のの攻撃と日米会談を重ねながら、大学治安体制、財政収奪等の攻撃を展開し、彼らの七〇年攻撃体制強化に全力を挙げるであらう。

(2) アメリカ・ニクソン政権の新路線

ジョンソン民主党政権に替り、本年一月共和党のニクソン政権が発足した。発足から現在まで、比較的短かい期間

だが、ニクソンの政策遂行の中にアメリカ帝国主義の一つの新しい路線がうちだされようとしてゐる。まず、第一に前政権からの懸案であつたABM建設を推し進めてあくまで対ソ軍事優位を貫いたこと、そして第二に、欧州へ就任旅行に出かけ、欧州帝国主義諸国に対し、アメリカを軸とする「対等で緊密な結合」を主張してきたこと、第三に、米韓合同での大空輸作戦を展開してみせたこと、第四に、貿易収支の赤字から金利引き上げ、輸入制限引締め政策を開始しはじめたこと、等々である。

こうした一連の政策は、ニクソン政権によつて、アメリカ帝国主義が、対ソ軍事優位下での米ソ取引を軸に、国際通貨不安と国内階級闘争により流動化を開始した欧州諸国を再統括し同時に、ベトナムからバキスタン、ラオス、朝鮮へと緊迫化するアジア階級闘争に対しては、近代的、機動的軍事介入の体制の強化に乗り出したことを意味してゐる。そして、絶えずくり返されるポンド・フラン危機の相互作用によつて、ますます危機的性格を深める帝国主義世界経済に対して、保護貿易主義的な輸入統制強化など「自国防衛」優先政策に傾きつつあるだろう。

このようなアメリカ帝国主義との新路線の開始は、七〇年に向う日本帝国主義の動向に対しても重要な影響をもたらさざるをえない。

日本帝国主義の軍事権力の主要な一部を代行する米軍の

地位は、激動するアジア階級闘争と日本階級闘争の中にあつて特殊な重要性をもつてゐるからに他ならない。アメリカ帝国主義は先に述べたように、アジア階級闘争の軍事弾圧と対ソ交渉の優位な展開をめざし、しかも軍事支出の肥大化にともなう経済防衛政策の破綻を防ぐため、軍事力の近代化、機動化を推進してゐる。先頃の米韓合同空輸作戦もそのあらわれであり、それに動員された沖繩嘉手納基地をはじめ横田厚木基地等本土の主要基地の大幅な機能強化を要求してゐる。

また、一昨年来急速に占拠闘争、街頭制圧闘争など激化しつつある日本階級闘争に対する治安軍事の最終保障は自衛隊―在日米軍の存在である。

こうして、七〇年安保は、アメリカ帝国主義の世界政策アジア階級闘争の進展とにつき動かされこの面からも反革命同盟としての再編強化に向かつてゐる。

(3) 七〇年闘争に向けてのわれわれの任務

最後にわれわれの七〇年闘争に向けての政治的組織的任務を明らかにしよう。

まず、われわれが直面してゐる闘いの政治的方針性についてであるが、最初にも見たように、敵階級の攻撃は、昨年の一〇・二一以降強権的に進められ、街頭行動への先制坑壕と徹底鎮圧・大量逮捕から、学園占拠闘争への暴力的介入、さらに基地実力闘争に対する攻撃へと向つてゐる。

従つてわれわれの任務は、敵の各個撃破攻撃に対して、再度学園占拠、職場実力闘争と基地包囲、街頭制圧闘争とを結合させ反撃体制を構築することにある。

とりわけ 五月決戦の構えを見せている成田三里塚闘争に対しわれわれは、沖縄人民解放を中心とする四月闘争とおして、学園占拠、職場実力闘争を推進してきた全力量を再結集して戦闘体制を築く必要がある。その中から、安保粉砕、工場占拠、学園占拠セネストをかちとるために全力を注がなければならない。そしてわれわれにとつて、安保粉砕は単に「条約」上のあれこれの処理問題ではなく、まさに、戦後政治軍事体制そのものへの挑戦として、プロレタリア日本革命の突破口としていかなければならない。また、七〇年安保は「アジア安保」であり、アジア労働者階級、農民の解放をも共に担う闘いとして推し進めようではないか。

次に、われわれが直面している組織方針について明らかにしてみたい。ここでもまず、先の総括からふりかえつてみると、学生戦線においては、(1)学園占拠闘争の発展に伴う新たな反乱組織として「全共闘」方式の大衆闘争組織が登場し、その階級的性格の規定が問われたこと、(2)そうした大衆闘争組織と「大衆行動委員会」との区別と関連を明確化することが要求された。また、労働戦線の方では、(1)未組織労働者の合同労組運動の展開、公労協基幹労働者

の下部段階における横断的組織を建設する方向性、(2)そして、これらと従来の「反戦青年委員会」との関わり方を明確にすることが迫られた。

学生戦線における「全共闘」は従来の全員加盟制自治会組織とは明確に分離した大衆闘争組織である。それは闘う大衆が自ら決議し執行する。臨時的な闘争機関であるしかもそれは闘う部分の大衆反乱組織であつて、旧来の大学秩序に依拠する右翼自治会主義者、日共等反革命的暴力集団に対する多かれ少なかれ暴力的強制革命の独裁をも行う組織である。こうした意味で、それは、労働者ソヴィエトの一環としての学生ソヴィエトの萌芽形態に他ならない。

労働戦線に登場した、いわゆる「合同労組」方式も、基本的にはこれと同質性を持つている。大メーカーからのしわよせによる今日の劣悪な労働条件の下で、中小、零細企業の労働者の不満は一樣に充満しきつてゐる。しかも大企業のような緩衝機構の役割を果す「組合」もなく、逆に強力な労務管理、職制支配も確立されていない。従つて一旦闘争に入るや、反乱的な職場実力闘争として展開する性格をもつており、周辺地域の同じ零細企業の労働者をも強力にひきつける可能性をもっている。それゆえ、「合同労組」方式は「労組」の形式をとりながらも、地域の未組織労働者の企業のわくを越えた大衆闘争組織として発展させ

ていかなければならない。

次にこうした大衆闘争組織といわゆる「行動委員会」との区別と関連について考えてみたい。大衆闘争組織の形成は、闘争自身の占拠闘争という反乱的闘争の発展を基礎としている。そして、その占拠闘争は、一般的な労働者や学生総意によつて決まるわけではなく、先進的部分による拠点占拠の全工場や全学園占拠への波及という発展をとる従つて、占拠闘争の展開と大衆闘争組織への建設を目的意識的に推し進めるためには、大衆闘争委員会の中核的な大衆行動委員会の存在が不可欠となつてくる。「行動委員会」に結集する先進的部分は、工場、職場、学園占拠闘争の推進と全工場、職場、学園の大衆闘争委員会の建設の意義をすでに確認し、大衆闘争委員会の臨時性をわきまえて、自らその中核部分となることを自覚して索引して支えるメンバーであろう。こうした行動委員会を、地域や、職場、学園の性格などに合わせて、さまざまな形で作ることが要求されている。われわれが建設してきた「安保共闘」は種々な個別的具体的な名称と任務をもつ「行動委員会」の結合体には他ならない。

青年共産同盟の第一の任務は、このような地域、職場、学園に種々な大衆闘争組織と行動委員会を創り出し、自らまずその共産主義的行動組織として中核的役割を果すことである。

安保共闘は、各種の行動委員会の共闘体であり、安保粉砕、占拠セネストへの共通性、連続性をもつた組織だといえ、個別的臨時的性格をもつたものである。

青年共産同盟は、それに対し、中央集権的な単一の全国的政治組織である。そして、青年共産同盟の組織は、各職場、地域、学園ごとに支部をもち、さらに、その内部の活動領域ごとに班をもっている。それは、常に行動委員会、拠点占拠闘争を築き、さらに反乱闘争へと転化させていく組織体制を作り出していくことを意味している。

青年共産同盟に当面たたちに要求されている任務は、自らの力によつて行動委員会を組織し、安保共闘の獲得した広範な全国的影響力を、実践的闘争体の力に固定させること、それを中軸にして、各種の自立的闘争団体を「実行委員会」に結集し独自の運動を可能とする闘いの翼をつくること、そのためにも、学園占拠闘争の中で完全に証明された、諸セクトの空論的言辭と日和見主義、個別闘争一全体の政治闘争（あるいは革命闘争）の単純分離と個別闘争の改良闘争へのすりかえ、これを現実の力をもつて批判し原則的党派闘争を貫徹すること、最後に、そうした活動の武器として懸案の青年共産同盟の機関誌を発刊すること―われわれは青年共産同盟結成と同時に、ただちにこれらの任務に着手しなければならない。

プロレタリア日本革命と 学生戦線

A 学生大衆の階級的性格

一九六八年三月十七日のトル・全中校の事実上の停止とフランス五月革命をきっかけにして、まいった戦後帝国主義の世界危機、およびその世界危機の激化のなかで日本階級闘争は戦後ブルジョア支配体制の本質問題である日米安保問題をむかえつつあるという事情は、ききたるべきプロレタリア日本革命における学生戦線の地位を確認することを必要としている。

そのために、しかし、現代日本における学生大衆の階級的地位を明確にすることが必要である。

今日の日本には五百万の高校生と二五〇万の大

独立営業者出身学生についていえば、今日の日本の学園はかれらがプロレタリア階級に転ずる一大貯水池となっているのである。

以上の事実を、今日の日本の学生大衆の圧倒的部分がプロレタリア階級の一部、産業予備軍の形態にあるプロレタリア階級を構成していることをものがたっている。

B プロレタリア階級戦線の

一部としての学生戦線

このこと、今日日本の学生運動がプロレタリア階級運動の一部以外のなものでもないことをいふ。

このことは、今日の日本の学生運動が本来の労働運動からは区別されたその特殊な一翼を構成することによって表現するものではない。

まず第一に学生大衆は、直接の生産過程——増

学生および短大生が存在する。

戦前の日本では、大学、専門学校に在学する学生大衆の大部分は、中間層——独立営業者からなる旧中間層および中小地主とホワイカー層からなる新中間層——の出身者であった。

だが、第二次世界大戦とその戦後インフレ期をへて新中間階級はプロレタリア化し中小地主層は独自の階級としてはほぼ消滅した。

また、五〇年代中期以降の高度成長をつうじて農民その他の独立営業者の比重も低下した。

したがって、今日の日本の学生大衆の大部分はその出身からみればあきらかにプロレタリア階級

に属する。プロレタリア階級の出身者である。

また、戦後の戦後資本の地位からみれば、今日の日本の学生大衆の圧倒的部分はプロレタリア階級に属する。その上層に属する。

取過程——であるプロレタリアではなく、これらそこにはいりてまなければならないプロレタリアであり、学生その他の生活費の大部分を家族の負担に依存している青年大衆である。

したがって第二に、学生大衆を直接に支配・統制しているものは、資本の直接の代理人としての

職制ではなく、ブルジョアイデオロギーの説教人としての教師でありブルジョア学園秩序である。したがって第三に、学生大衆の直接に闘うものは、資本の直接の搾取機構ではなく、ブルジョア教育と学園秩序であり、それをささえる一般社会的な政治的抑圧と経済収奪である。

第四に、学生大衆の圧倒的部分はプロレタリア階級に属するといえ、他の一部はブルジョア階級や小ブルジョア階級に属する。したがって全体としては学生は第一の階級を形成するもの

ではない。だから、学生運動は、プロレタリア階級運動の一部を構成するものとしては、学生大衆全体を包摂しうるものではなく、圧倒的大部分ではあるがその一部分を包摂しうるにすぎない。

これらの諸事情は、学生運動にたいし、本来の労働運動のばあいよりもはるかに濃厚な小ブルジョア的色彩をあたえている。

学生運動の小ブルジョア性——観念的急進性、急激な昂揚性と挫折性——、はこの点に由来するのであって、学生大衆の大部分が小ブルジョア階級にぞくすることに由来するものではない。

C プロレタリア日本革命と

学生ソビエト

きたるべきプロレタリア日本革命の主力は、いふまでもなく、プロレタリア階級である。

このことは、学生戦線が、たんに当面の諸闘争においてだけでなく、プロレタリア階級の革命権力樹立の闘争においてもその不可分の構成部分をなすこと、したがって、プロレタリアソビエト権力の特長な構成部分として学生ソビエトが樹立されなければならないことをいみする。

だが、労働者本隊のばあいとはことなり、この学生ソビエトは学生大衆全体を包摂するものではなく、そこからブルジョアのおよび小ブルジョア的部分が排除されなければならない。

二、日本帝国主義的教育、学

園攻撃

A 教育のナショナリズム攻撃

今日（はじまっている）教育の帝国主義的・国家主義的攻撃は、五〇年代にはじまった反動文教政策

その同盟軍は半プロレタリア階級であり、今日の日本の農民大衆の圧倒的部分はこれにぞくするこれにたいし、一部の富農層やその他の商工業の独立営業者からなる小ブルジョア階級は、中立化の対象となるにすぎない。

あるいは、せいぜいかれら小ブルジョア階級はそれが反独占反政府闘争に起上るかぎり、プロレタリア階級がブルジョア支配に打撃をあたえるためにそれを促進し利用するにすぎない。

だがこれにたいし学生大衆の大部分は、プロレタリア日本革命のたんなる同盟軍でもなければ中立化の対象でもなく、むしろその主力階級そのものの一部分——その特殊な構成部分を形成する。

学生大衆の圧倒的大部分はプロレタリア階級自身にぞくし、したがって学生戦線は今日、日本のプロレタリア階級戦線の特殊な一部だからである

——戦後アメリカ占領軍によって日本のブルジョア支配階級におしつけられた教育民主化にたいする反動的まきかえし政策——の単純な延長線上にあるのではない。

今日、日本のブルジョア支配階級とその国家権力を教育の全般的な帝国主義的・国家主義的再編へとかりたてているものは、六〇年代初頭にはじまった戦後帝国主義の世界体制の動揺と日本帝国主義の高度成長経済の行詰り、それによって強制されたブルジョア支配階級の国内人民大衆への経済的抑圧の強化およびそこから生じた日本の戦後民主主義体制の動揺と官僚執行権力独裁への傾斜だからであり、またそれにもなつて日本のブルジョア支配階級の国民結集政策が議会主義的・経済的結集政策から国家主義的・国権的結集政策へと移行したという事情からである。

こうした教育の、国家主義的・国家主義的攻撃は初等中等教育で国防教育の強制、神話の持込み教師や教科書にたいする国家統制の強化、等々としてあらわれており、また高等教育では、ことに六二年の大学管理法の挫折以降、予算割当を手段とする文部権力の大学統制の強化、学生既得自治権への介入、大学秩序の権威主義的強化、私学における理事会権力の強化等々としてあらわれている。これらの教育への国家主義的・帝国主義的攻撃は、ブルジョア支配階級の国内人民大衆に対する全般的な政治的・経済的攻撃と、官僚執行権力による現行秩序の強硬的維持そのための国家主義的・帝国主義的国民政策の一環にはかならない。

III 職業教育の強化と労働力商品のマスプロ

こればかりではない。

もはやブルジョア支配階級の養成所ではなく、プロレタリア下士官、プロレタリア的技術者を安く手際よく大量に作り出すための工場にすぎない。この労働力商品のマスプロ工場で未来のプロレタリア下士官に与えられるのは、物知り事典にも散らばっているような教養の断片と職業教育へのいのちである。

しかもこうした労働力商品のマスプロは、工場職場における集中合併合理化、労働強化、計算機の大量導入による事務管理組織の機構化等々の攻撃の一環にはかならない。

戦前にはブルジョア将校としての学生疎外が支配的であったとすれば、今日では労働力商品としての、しかも合理化の対象物としての学生疎外が支配的である。

五十年代中期以降の高度成長期をへて、日本の

大学教育の地位は根本的に変化した。

戦前の高等教育はブルジョア支配階級の管理将校、官僚将校、ブルジョアイデオロギーの養成所であった。したがってこれらの養成所で未来のプロレタリア将校たちに詰めこまれた人間的教養なるものも、彼らを特殊身分として人民大衆から区別するための手段であって、それは人民大衆の大部分が人間的教養から排除されることによって補足されていた。

したがってまた、大学自治なるものも大学秩序の権威主義的体系と一体化した将校クラブの自治にすぎなかった。

だが、こうした事情は今日の大学では過去の遺物となっている。

一五〇万の学生大衆を収容する今日の大学は、

C 資本と国家財政による学生収奪

こればかりではない。

今日の学生大衆はその父兄とともに、資本と国家財政の広汎な収奪対象となっている。

まず第一に運賃値上げ、米価値上げ、健保値上げ等々のあいづく公共料金値上げや住居、生活費の一般的高騰をとおして、今日の学生大衆は資本と国家財政の収奪の広汎な対象となっている。

第二に今日の学生大衆は多かれ少なかれアルバイトで学費の一部を補っているが、そのアルバイト労働で独占利潤の最下層を支える低賃金労働者の一部を構成している。

第三に資本の要請にこたえるこうした労働力商品の大量生産は、今日の日本では国家教育政策の

節約のために私学にしわ寄せされ、この私学で学生大衆の圧倒的部分は国立大の数倍の学費を自らの手で支払って、劣悪な施設でマイクによる大教室授業を受けている。

しかもこの学生自身の負担による労働力商品のマスプロ過程それ自体が、日大に典型的に示されるように私学資本の利潤源泉となっている。

D 学園秩序の強権的維持の策動と学生既得権への攻撃

これらの国家主義的イデオロギー攻撃や労働力商品化の攻撃や、さらにはまた経済収奪の攻撃に対し、防衛と抵抗の闘争に立ち上りつつある学生大衆に対して、国家権力による学園秩序の強権的維持の策動と学生既得権の剥奪の攻撃がしつとくりくりかえされている。

がそれにほかならない。

三、安保をめぐる日本階級闘争と学園反乱の開始

A 基地闘争の全国的昂揚と学園反乱の開始

このような教育学園攻撃を一環とする日本帝国主义の労働者人民大衆に対する経済的政治的攻撃は今日安保攻撃へと政治的に繋約されつつある。

そしてこの安保攻撃に対する労働者人民大衆の抵抗と反撃の闘争は、砂川、羽田、佐世保闘争以来、本土・沖縄の基地撤去の実力大衆闘争として昂揚しつつある。

そしてこの実力基地闘争は中大学費闘争をきっかけとして大衆的な学園占拠闘争へと波及し、ま

戦後階級闘争の敗北の過程で教職員労働者はスト権を剥奪され、また五十年代の反動攻勢の中で教育委員会の公選制は廃止され、教員に対する国家権力の統制と職制権力とは飛躍的に強化された。こうした状況のもとでは、当然のことながら、

資本と国家権力の教育学園攻撃に対する唯一のとりでは、学生自治運動のほかにない。教職員のスト権のない学園では、教授会自治なるものはブルジョア学園秩序の補足物でしかないからである。だから今日の資本と国家権力の教育学園攻撃の主要な矛先は、学生自治運動に向けられている。

文部省による予算の割当を利用した学生寮・会館、その他の福利厚生施設の運営規則の改悪、あいつぐ学生処分、逮捕学生に対する奨学金停止、学生大衆に対する秘密公安活動、就職事務の差別、運動隊のあいつぐ導入、右翼学生暴力の利用等々

他方では全通年次物タメ闘争、国鉄反合同闘争をきっかけにして、労働者の職場実力闘争、職場占拠闘争へと波及しはじめた。

こうして日本階級闘争もまた基地実力闘争を媒介にして、ヨーロッパ諸国と同様職場占拠・学園占拠・街頭制圧の実力闘争——フランス五月革命の一千万ゼネストはそうした闘争の必然的な爆発点であった——へ大きく一步を踏み出したのである。

学費値上げ攻撃をはじめ粉砕した中大占拠闘争はそれ以前の学園闘争と本質的に異なっている。

その特徴は羽田、佐世保闘争の学園化、運動隊導入に対する学生大衆の徹底抗戦の闘争にあるのであって、それが最終的には鎮圧攻撃の中止を余義なくさせたのであった。

こうした可能性は日大闘争で現実化した。しかも日大闘争はたんにたびかきなる運動隊の導入を

実力ではね返したといふばかりでなく、学園占拠闘争をさらに街頭制圧闘争へと発展させ、ブルジョア法秩序とその暴力的執行権力を学園と街頭とから排除した。

それゆえ中大闘争を突破口とし、日大、東大、教育大、東洋大、慶応闘争等々として全国的に拡大しつつある今日の学園闘争は、ブルジョア学園秩序、それを支える国家権力に対する学生大衆の公然たる反乱の開始をいふする。

日本のブルジョア学園秩序は、この学生反乱によつてすでに事実上なかに麻痺させられ解体させられている。

いいかえれば、日本のブルジョア支配階級は学生大衆に対する全般的な騒乱罪の適用、学園の長期封鎖、武装権力の常駐体制なしにはブルジョア学園秩序を維持しえないところまで追い込まれて

いるのである。

B ブルジョア秩序の弱い環としての学園秩序

このことは日本階級闘争がその学生戦線においてすでにブルジョア法秩序——と秩序とそのための暴力——を部分的に突破し、破壊したことを意味する。

ではなぜ日本の階級闘争は他の戦線、ことに労働戦線ではそうでないのに、特殊的に学生戦線においてブルジョア秩序をなかに破壊し麻痺させてしまったのか。

いうまでもなくそれは学園秩序が現代日本のブルジョア秩序の最も弱い環を形づくっているからにほかならない。

数千数万の学生大衆の密集する今日の大学は、工場や職場とは異なりこれらの大衆を支配する階

いる。

学園占拠とは異なり工場占拠は職制権力やそれとを補完する社民権力との、そしてまた国家暴力との、プロレタリア大衆の全生活をかけた血みどろの闘争を必要とするからであり、したがってそれは全国的な反乱ゼネストとなって爆発するまでは必然的にゲリラ的、一時的、分散的なものとなるざるをえないからである。

こうして今日の日本の学園占拠闘争は、労働者本隊の工場占拠の反乱ゼネストへの先き駆けののろしとなっている。

C 日共・民青と学生右翼の役割

まさかこの際において学生戦線は、今日の日本のプロレタリア階級闘争——フランス五月革命型の反乱ゼネストへ向けて一歩を踏み出し始めた日本の階級闘争——の中で、特殊な先駆性をもって

ついでにすぎないといふばかりでなく、その反動的敵対物に成り下つてゐることを余すところなく暴露した。

パリケードによつてすでになほブルジョア学園秩序を解体してしまつた学生大衆にとつては、学園自治とは大衆的実力による学生自己秩序の学校権力への強制以外のなにもでもなく、学生自身の手による学園管理以外のなにもでもありえない。

そしていうまでもなくそれはブルジョア学園秩序の真正面からの否定にはかならない。それゆゑ今日の日本の学生運動はパリケードによる学生自治の主張によつて、ブルジョア秩序の全社会的な否定、プロレタリア秩序の全社会的な樹立なしには、いいかえればプロレタリアソビエト権力とその二項としての学生ソビエト権力の樹立なしには

まひとつの組織暴力は学生右翼の暴力である。

これらの二つの組織暴力がパリケードに対抗して奮起し始めたといふことは、日本の階級闘争において既成のブルジョア学園秩序の維持がすでに部分的に国界に達しはじめたことの表現にほかならない。

それは来るべき革命と反革命の激突の時代における既成の国家権力とは異つた新たな反革命暴力の登場を示している。

四、安保闘争と学生戦線における革命党の任務

A 学生戦線における革命党の任務

以上のような日本階級闘争における学生戦線の地位、世界危機の開始によつて強制された日本帝

自己を貫徹し完成しない要求を提起しているのである。

こうした学生自治の要求に対して一部の自称「大学革命」論者の宣伝する学園の管理運営への学生参加論や、また日共・民青諸君の安売りする大学自治と大学民主主義のための教授・学生の共闘論なるものは、すでにブルジョア学園秩序のりこえて進み始めている学生大衆をブルジョア秩序の限界内に引きもたせようとする反動的な試みでしかない。

最近の一傾向は自称進歩的教授諸君が、パリケードに仰天してこうした大学革命論や教授・学生共闘論の陣營に移行したことであるが、それはパリケードに敵対する日共・民青諸君の「組織された暴力」によつて補充されている。

こうした日共・民青諸君の組織暴力に対し、い

国主義の国内攻撃が安保攻撃に集約されつつあるという事情、および基地闘争を軸にする職場占

拠闘争と学園占拠闘争とにおいて日本の労働者学生大衆がすでに部分的に反動的実力闘争に立ち上つてあるという事情から、学生戦線におけるプロレタリア革命党の任務は、つぎのように規定される。

(一)基地闘争を軸にして現在すでに始まっている学園占拠闘争を、労働者本隊の職場占拠闘争と呼応しつつ安保闘争を利用して現行ブルジョア体制とその国家権力にたいする工場占拠・学園占拠・街頭制圧・基地包圍のゼネスト闘争にまで発展させるために全力をつくすこと。

(二)このゼネスト闘争を日本帝國主義とその国家権力の打倒、日本からのアメリカ軍事権力の一掃プロレタリアソビエト権力樹立のための労働者学

生の武装反乱に転化するために全力を尽くすこと
(三)このプロレタリア日本革命を、アジアからの
帝國主義支配の一部とブルジョア・地主階級の打
倒のためのプロレタリア革命戦争へと拡大し、そ
れによってプロレタリア世界革命への突破口を切
りひらくために全力を尽くすこと。

Ⅱ 安保闘争における学生戦線

戦での大衆組織戦術

以上のような革命党の任務から、安保闘争にお
ける学生戦線での革命党の大衆組織戦術は、さし
あたり次のように規定される。

(一)各学園、クラス、サークル、ゼミ、寮に党独
自の共産主義大衆政治組織を確立すること。

(二)この共産主義政治組織を基軸にして、すでに
抵抗と反響にたもめがらいつつある種々大衆団体

個人を、既成の自治会組織の枠にとらわれること
なく、実力大衆闘争の統一戦線に結集し、これを
大衆闘争委員会ないし大衆行動委員会に組織する
こと。
(三)この大衆行動委員会のもとに実力防衛隊を組
織すること。

(四)各学園の大衆行動委員会の地域的、地方的、
全国的結合とそれによる学生戦線の再編成をはか
ること。

(五)大衆闘争に当っては、自治会内統一戦線戦術
と自治会の枠をこえる統一戦線戦術とが有機的に結
合されなければならないが、学生戦線では、主軸
はすでに後者に移行している。

学生戦線では、スト権投票による自治会の圧力
ストライキではなく、右翼暴力や日共・民青暴力

組織戦術とから、学生戦線におけるその主要な大
衆闘争スローガンは、次のようになる。

A

☆安保条約破棄、核武装粉碎

☆ベトナム侵略加担反対

☆自衛隊解散、基地撤去、沖縄米軍基地撤去・

米軍政打倒

☆教育と学園の國家主義的・帝國主義的再編成

の阻止

☆授業料、交通費その他一切の学費値上げ阻止

☆学生自身の手による学園自治

B

☆工場占拠、学園占拠、街頭制圧、基地包圍の

ゼネストで安保を粉碎せよ、

☆全ての学園に大衆行動委員会をつくらせよ、

☆大衆行動委員会のなかに実力あり、右翼を

に抗しての、大衆行動委員会ないし共闘委員会に
よる拠点占拠ストライキの全学無期限占拠ストラ
イキへの波及という反乱的闘争形態がすでにくり
かえし出現しているからである。

(六)学生戦線では、社共既成指導部の裏切りの暴
露と批判は、言葉による批判から行動による批判
へと移行していること、ことに日共・民青にたい
しては、かれらの組織暴力にたいする大衆的実力
行動による批判へと移行していること。

(七)実力基地闘争、街頭制圧闘争、学園占拠闘争
の発展を通じて、大衆行動委員会の学生ソビエト
への発展を目的意識的に追求すること。

C 学生戦線における革命党

の大衆闘争スローガン

以上のような学生戦線における革命党の任務と

☆資本家政府打倒、米軍追放、沖縄人民解放、
☆労働者人民権力の樹立、労働者・学生の武装

大衆闘争と遊撃戦 の結合へ

全国の労働者学生諸君、
七〇年をあと二年にひかえた六
九年階級闘争は、東大・日大をは
じめとする全国学園占拠闘争にた
いする国家権力・機動隊の一大攻
勢をもって開始された。
なぜか。

七〇年をめぐる日本の安保階級
闘争は、六七年の羽田闘争にはじ
まる実力基地闘争が大衆的な学園
占拠バリケード戦へと波及し、そ
れがさらに労働者大衆の職場占拠
闘争に波及しはじめるというかた
ちで発展してきたからであり、六
八年秋の一〇・二二新宿占拠闘争

以後、学園占拠闘争こそが、日本
の大衆的反乱闘争の先頭になつて
きたからである。
つまり、ブルジョア支配階級・
国家権力は、大衆的反乱闘争の先
頭になつてゐる学園反乱を抑しつ
ぶし、それをきづつたときにする
ことによつて、いまだつやむけにし

て巨大な反乱闘争へとたちあがる
うとしてゐる労働者大衆を感服し
どうかつしてゐるのである。
だから、一・一三月の学園大攻撃
は、一〇・二二新宿駅騒乱暴動を
突破口にするこれらの街頭大攻
勢の第二幕であり、街頭闘争戦と
学園占拠戦を先頭にして巨大な反

乱闘争へと向いつつある日本の安
保階級闘争全体にたいする「法と
秩序」の先制攻撃なのだ。

全国の労働者学生諸君、

七〇年へ向けての安保階級闘争

は、こつした敵権力の治安攻撃の
まつたたなかで、この四月に重大
な局面をかえようとしている。

四・二八沖繩闘争、それと前後
して山場となる香蘭、三里塚ボ
ーリング阻止闘争、学園治安立法の
策動、等々がそれだ。

しかも、この四月闘争は、六月
の外相訪米阻止闘争、六・一五闘
争、安保放棄通告闘争、アスパッ
ク粉砕闘争へと直接につながつて
いく一連の連続闘争の出発点だ。

かりにこの四月闘争で現在の敵
権力の大連庄攻撃をまきかえしあ
らたな攻勢への突破口をつくりだ
すことができないとすれば、日本
の安保階級闘争は、重大な六月闘

争への展望を見失ない、ひいては
秋の佐藤訪米阻止闘争はきわめて
困難な局面にたたはれるを得な
いであらう。

二

全国の労働者学生諸君、

六九年階級闘争の総括は、まぎ
にこのようにして、四月―六月闘
争にかかつてゐるのだ。

そして七〇年闘争の全運命は、
この六九年闘争の総括にかかつて
ゐるのだ。

われわれは、なんとして四月
闘争で現在の敵の先制攻撃に阻止
めをかけ、四―六月闘争への大衆
的な突破口をつくりださなければ
ならない。

まさにそれが、安保階級闘争の
要求する四月闘争の任務なのだ。

全国の労働者学生諸君、
だがわれわれは、この任務を果

すためには、日本の安保階級闘争
が今日つぎあたつてゐる歴史的な
ような性質のものか、もついちど
確認しておかなければならない。

六七年秋の二回の羽田闘争には

じまる日本の安保階級闘争は、社

・共産党指導部の主導する議会的

・組合的示威闘争としてではなく

一部の先進的行動部隊の直接実力

闘争―街頭制圧・学園占拠等の

直接実力闘争―が労働者学生大

衆をまきこみ、それが大衆の実力

闘争へと拡大波及するというかた

ちで発展してきた。

先進的行動部隊の実力街頭戦へ

の「市民」や「群衆」の参加と大

衆的街頭制圧戦、地区占拠闘争へ

のその拡大、学園闘争における

拠点占拠闘争の全学占拠バリケ

ード戦への拡大、等々がそれであつ

て、明らかにこれは、労働組合や

学生自治会などの限りの階級闘争

の限界を超える直接反乱の闘争方
式―先進的部分の部分反乱から
出発してそれを行動自身によつて
全体に押しひろげるという直接反
乱の闘争方式―であつた。

そしてまさにこつした直接反乱

の闘争方式こそが、それまでの議

会主義的・組合主義的・市民主義

的闘争の無力性をうきあがらせ、

社・共産党指導部の日和見性と緩

切り性こそ大衆的にはくろし、六

七年以来の日本階級闘争の全体を

ダイナミックに推進してきたので

ある。

全国の労働者学生諸君、

こつした点を踏襲するならば、一

〇・二二以後はじまつた敵権力の

大連庄攻撃が、このような直接反

乱の闘争方式にたいするこれらの

大先制攻撃であることは一目瞭然

ではないか。

明らかにそれは、大衆的反乱闘

争へと波及するまでに先進的反乱部隊を集中的に粉砕し、それによつて一方では大衆的反乱闘争の芽を早期につみとることも、他方では同時にそれによつてたまたまがもつて起る後進の大衆部隊を制圧することを得たものだ。

三

全国の労働者を生活者！

その第一は、大衆的反乱闘争を先行的に誘導する先導的行動部隊——行動委員会——を徹底的に拡大強化し、深く広く大衆のなかに根を下すことだ。

今日の日本労働闘争の特長の一つは、種々な規模の様々な色合いをもつた無数の自発的な大衆行動団体が誕生しつつあることである。

われわれは、これらの大衆行動団体、活動家団体の自発的な創意性や自立的なダイナミズムをできるだけ尊重しながら、それらを共同的大衆行動委員会——大衆行動委員会の共同——に全力をあげ

て結合し、統合しなければならぬ。

そしてまたにはこうした大衆行動委員会共同に組織できない諸団体にたいしては、われわれは、特定の闘争議題のための共同実行委員会の結成などの過渡的方法を柔軟に運用しなければならぬ。

われわれは、『前衛』七号で明らかにしたように、大衆的反乱闘争の突破口をきりひらくこうした大衆行動委員会の建設を、職場、学園、地域における安保紛糾行動委員の結成、それらの安保紛糾共同への結合、それを軸とする種々な大衆団体との共同実行委員会の結成、等々として実現するために全力を尽くすであらう。

日本労働闘争の現局面のいま一つの特徴は、これまで本格的な闘争にまだひき入れられなかったものな

い新しい戦線で、大衆的反乱闘争の萌芽がはじまっているといふことだ。

その一つは明らかに高校生の学闘闘争である。

若い高校生のエネルギーは巨大である。反乱闘争の突破口がどこかをつくりだされるなら、それはたまたまに全国に波及するであらう。

なぜなら、ここには大学よりもさらに極端な抑圧と疎外が集中されており、たんなる人権闘争、たんなる民主主義闘争でさえもひとたび大衆的に燃発すれば、全般的な学園反乱闘争へと急速に発展するほかはないからである。

最近の卒業式闘争の全国的流行と、それにたいする政府、支配階級の不安なまなざしとはこのことをなによりも明白にものがなっている。

いま一つは、中小企業未組織下

労働者の大衆的反乱闘争への胎動である。

日本の労働者階級の三つ二を占めるこれらの未組織下労働者の多くは、連綿と工場、町工場、小企業に属する。資本の二重、三重の収奪の目にしごかれていて、しかも日本資本主義の発展成長は、これらの未組織下労働者の代償を、長時間労働によつて根底から支えられてきたのだ。

だから、ここには巨大な大衆反乱のエネルギーが秘められていて、じつと、一〇・二二新宿闘争や一・一八一九神田カルチェラタン闘争において機動隊と果敢に闘った「群衆」や「ヤジウマ」の一大供給源は、これら未組織下労働者からなりたつていたのである。われわれは、これら二つのまったく新しい戦線に全力をあげて反乱闘争のための大衆行動委員会を組

む。日本資本主義の未組織下労働者の大衆的反乱闘争をもつて、基幹産業労働者を攻撃し、われらを社会政策指導部、組合官僚のくびきから解放しなければならぬ。

大衆的反乱闘争の現局面のいま一つの特徴は、これまで本格的な闘争にまだひき入れられなかったものな

い新しい戦線で、大衆的反乱闘争の萌芽がはじまっているといふことだ。

そしてまたにはこうした大衆行動委員会共同に組織できない諸団体にたいしては、われわれは、特定の闘争議題のための共同実行委員会の結成などの過渡的方法を柔軟に運用しなければならぬ。

われわれは、『前衛』七号で明らかにしたように、大衆的反乱闘争の突破口をきりひらくこうした大衆行動委員会の建設を、職場、学園、地域における安保紛糾行動委員の結成、それらの安保紛糾共同への結合、それを軸とする種々な大衆団体との共同実行委員会の結成、等々として実現するために全力を尽くすであらう。

四

全国の労働者を生活者！

それはこれまでの戦闘方法では不可能だ。これまでの戦闘方法は主として先行的な機動隊の密着した突撃闘争によつて機動隊の動きをやり取り、それによつて大衆的反乱闘争を誘導するといふ点にあった。また、学園では、先行的な拠点占拠闘争を断平として貫徹しそ

れを全うし、これをいかに可能か、いかにしてそれは可能か、という点にあった。

だが、最近の戦闘は、機動隊の装備、人員、結集力の増強のために、また占拠拠点へのこれらの早期の先制攻撃のために、こうした密着部隊の突撃闘争や断定的な拠点占拠闘争では、機動隊の動きを破ることがますます困難になりつつあることを教えている。

このことは、なにをものかである。

全国の労働者を生活者！

それは、比較的小規模な部隊によつて敵の拠点を集中的に攻撃する同時多面的な奇襲戦、運動戦、進軍戦が、必要になつてきていることだ。

ブルジョア国家権力の組織力は、機動隊に集中してはいけなくなる。それの下組織成員、一般職員、兵士は、質量ともに落ちてやういふ

りまたは徴募された労働者人民大衆自身だ。だから、ブルジョア國家權力の軍隊組織、警察組織は、一般農民、兵士のあらゆる自衛性を剥奪し、身分制的、閉鎖的、官僚制的な特権システムで、專政的にかれらを統制することをその根本的な組織原則としている。

だからこそ、かれらの組織暴力は、正規軍相互の戦闘や組織部隊だけの反乱闘争にたいしてはきわめて有効ではあるが、しかし、かれら部隊組織をばかにかに上まわる巨大な大衆反乱や、小部隊の迅速な遊撃戦にたいしては、手のほどこしようがないのだ。

いまわれわれは、比較的小部隊の迅速果敢な遊撃戦で敵の弱みを集中的に攻撃し、敵の組織勢力を分断し、かれらを無力化し、その積み重ねによって、大衆的反乱闘争を誘導し組織する戦術を講じているのである。現在の状況

字ばなければならぬ。
しかも、じつさいには、こうした遊撃戦の一つの形態は、すでに自然発生的にいたるところではじまっているのだ。
その一つは、明らかに東大闘争だ。

一月二八—一九日の安田バリケードの破壊以来、東大を支配しているのは、機動隊の有事駐留体制であり、機動隊秩序だ。ここでは大衆反乱闘争への発展の可能性のあるいくつかの拠点闘争は、すべて機動隊の早期の先制攻撃によってつぶされていく。このため、大衆反乱闘争は、必然的に、個々の教授の責任追及闘争や個々の授業妨害闘争の反復へと移行し、それによってブルジョア的秩序の回復を阻止し、闘争の所与たる継続を宣明しているのである。現在の状況

のもとは、これが大衆的反乱闘争を準備する唯一の方法であることはまちがいない。そして明らかにこれは、遊撃戦の一種であり、また、遊撃戦を通じて大衆反乱闘争を準備する方法の一つなのだ。

遊撃戦のもつ一つの例は、最近全国的に頒布している高校生の卒業式闘争に示されている。高校学園闘争は、学園ブルジョア秩序の強固性と大衆の意識状況からみて、まだ固定的な拠点占拠闘争は一般的には困難だからであり、敵の虚を衝く奇襲的な反乱闘争が、大衆反乱闘争への呼びかけの方法として、ここでは有効だからである。

こうした遊撃戦は、一たび労働運動に展開するならば、じつは、日本資本主義の現象なのである。ここでは職制権力と組合官僚権力—企業内ブルジョア秩序—が、労働

働者大衆のあらゆる反乱闘争に眼をひからしているからだ。

労働運動では、拠点占拠闘争の大衆的占拠闘争への拡大という学園闘争にくりかえしみられる闘争方式は、一般にはただ、金銭的な反乱闘争の直接の前段階としてのみ可能であろう。

ふりかえっていえば、学園闘争でそれがしばしば出現するのは、学園は資本の直接の搾取過程ではなく企業内の職制権力機構に匹敵する権力機構が存在しないからなのであり、その意味で学園は、ブルジョア秩序の弱い環だからであった。

五

全国の労働者学生諸君、遊撃戦の意義は、じつは、たんにこのように大衆的反乱闘争を準備

レニンはそれをこう述べている。
「モスクワがわれわれにあたる

た第三の偉大な教訓は、戦術と戦起のための勢力の組織にかんするものである。軍事上の戦術は、軍事技術の水準にかかっている。——この原理をいささかよくうたマルクス主義者に説明して

れたのは、エンゲルスである。今日の軍事技術は、一九世紀中葉のそれではない。砲兵にむかって密集して行動したり、ピストルでバリケードを守ったりするのは、ば

かけたことである。そしてカワッキーが、モスクワ騒ぎをへた今日ではエンゲルスの結論は再検討すべきである。モスクワは新しいバリケード戦術を提唱したと

書いたのは、正しかった。その戦術とは、バルチザン戦争の戦術であった。この戦術の要求する組織

それを補足する遊撃戦として機能していたわけである。

そして國家權力の組織暴力のますます増強される今日の階級闘争の状況下では、こうした遊撃戦による大衆的反乱闘争の側面からの援助は、その重要性をますます増大しつつあるといわなければならない。

そしてまた、数百万の人口と複雑多岐な交通網の密集した現代日本大都市では、平常の状態においてさえ都市機能はなかなかに麻痺しているのだから、機動隊、自衛隊の近代機動力もみかけただおしものにもすぎず、むしろかえってぞうした遊撃戦への弱点を増大させているのである。

それゆえ、遊撃戦が重要なのはたんに農民人口と農村地帯が圧倒的な後進階級闘争のばあいだけ

六

最後にわれわれは、革命闘争でいかにたいする遊撃戦の意義を簡明しておかなければならない。

じつは、遊撃戦は、たんに日本の安保階級闘争の当面の壁をつきやぶるという観点からだけ必要になつていくのではなく、現代革命そのものにかかわる根本問題だからである。

全国の労働者学生諸君！

遊撃戦が二〇世紀の現代革命に はじめて歴史的に登場したのは、一九〇五年の第一次ロシア革命におけるモスクワ騒ぎにおいてであった。

は、機動的な、ごく小人数の小部隊である。すなわち、十人組、三人組、ときには二人組さえある。日、われわれのあいだでは五人組や二人組が活にのぼる、せせら笑うは市民主義者に出あつたともめずらしい。だが、このせせら笑いは、現代の軍事技術のもとでの市街戦から生れる戦術と組織のあたらしい問題に目をさそぐくならない方法ではない。諸君、モスクワ蜂起の物語を熟読玩味したまえ。そうすれば諸君は、「五人組」が「新しいバリケード戦術」の問題とどんな結びつきをもっているかがおわかりになる。

モスクワは、この戦術を提起したが、それを発展させ、多少とも広汎な、真に大衆的な規模で展開するところまではいかなかった。武装蜂起の数は少なく、労働者大衆は、戦いに攻撃せよというスローガンをあやふやに、またこのスローガンを大行にうつしもしなかった。バルチザン隊の性格は、あまりにも一律で、その武器と闘争方法は不十分であり、大衆指導の能力はほとんど発達していなかった。われわれは、モスクワの経験からまなび、この経験を大衆のなかにひろめ、またこの経験をさらに発展させるのに大衆自身の創造力をよびおこしながら、以上の欠陥を補つていかなければならぬ。また、補つていかなければならぬ。そして十二月以後はほとんど絶えまなくロシアのいたるところで行なわれているバルチザン戦争と大衆的テロルは、蜂起のさい正しい戦術を大衆におしやることを疑いもなく助けるであろう。社会民主党は、この大衆的テロルを承認し、それを自分の戦術にとりい

れなければならぬ。ただそのさい、このテロルを組織化し、統制し、労働運動と全般的な革命闘争の利益と条件に従属させ、このバルチザン戦争の浮浪人的歪曲を容赦なく、排除し、きりすてねばならぬことは、いうまでもない。バルチザン戦争のこのそういう浮浪人的歪曲は、モスクワ人達が蜂起のときに、またラトヴィア人たちが有名でラトヴィア共和国事件のときに、実に容赦なく始末をつけたのである。このばあい、バリケード戦にかんするエンゲルスの結論としてレニンが念頭においているのは、マルスの「インスにける階級闘争」の一八九五年版にエンゲルスが書いた序文のことであつてここであつたのは、一八四八年革命以後の武器の発達と、街路の整理拡大は、階級闘争のより大衆的

バリケード戦を不可能にしたと結論したのであつた。これにたいし、一九〇五年のロシア革命は、大衆的バリケード戦がバルチザン戦と結合されるならば、それが武装蜂起の新しい方法として役立ちつることを明らかにしたといつて可い。そして、一九〇五年ロシア革命においてすでにそうであつたとすれば、その後の武器と輸送組織の発達、工場占拠セネスト、二重権力、武装蜂起という現代革命の基本路線にたいし、都市を中心とする遊撃戦、バルチザン戦の果す役割を、なほいさう重大であるといふわけにはいかない。

何か 大開戦に 東問われ たか

A 学園総攻撃

の開始

全都全国の学生、労働者諸君、三十五時間におよぶ死闘ののち、全国学園闘争の拠点、東大安田解放闘争バリケードは、ついに国家権力、機動隊によって破壊された。

この攻撃のため、日本のブルジョア支配階級と国家権力は、東大本郷、神田地区に戒厳体制を敷き八千五百名の機動隊、幾台かのヘリコプター、放水車、一万発のガス弾、八〇名の射撃隊を動員し、催涙剤の大量空中投下、昼夜連続の放水、ガス銃の水平射撃など、

一 国家権力の学園総攻撃の開始

あらゆる手段をもつた。

全都全国の学生、労働者諸君、

この攻撃は、一東大闘争にたいする攻撃では決してない。

明らかにそれは、全国学園闘争にたいする政府・支配階級の攻撃がはじまつたことを意味する。

それはまた、さきにこのようにものとして、全国学園闘争を重要な一環とする日本の労働者階級・人民の安保階級闘争そのものにした。いすブルジョア国家権力の先制攻撃がはじまつたことを意味する。

だから、この総攻撃にたいし総反撃に起ちあがらねば、この攻撃の政治的背景およびこの攻撃によつてもたらされた事態の性格

をまずもって治済に確立しなければならぬ。

B 学園総攻撃

の政治的背景

全部全国の学生、労働者諸君、この攻撃の背後にあるものは、昨年一〇・二二国際反戦闘争以後の日本の安保階級闘争の特殊な局面だ。

一昨年の砂川・羽田闘争にはじまった日本の安保階級闘争は、全国民力基地闘争を軸にして、学園占拠闘争、反合・反連庄の職場占拠闘争へと波及しつつこの三者の相互促進的なエスカレーション関係をもって発展してきた。

そして一〇・二二国際反戦闘争において、ついにそれは数万人大衆の深夜におよぶ新宿占拠闘争とな

って爆発し、日本でも交通と大衆の密集する都心地区では数日間の連続地区占拠闘争がまったく可能であること、またそこからフラン

スの権威が大衆によって破壊される可能性が消滅したのちに、ようやくにして騒乱発動にふみきることができたのである。

だが同時に、この新宿占拠闘争において、反戦、全連の戦術的組織部隊は数万人大衆がなお職場内、駅周辺地区にとどまって叛乱を継続しつつあるにもかかわらずこれら大衆を放置して新宿からひきあげた。

これは、国家権力が現実の大衆叛乱にたいしてではなく、むしろ将来の大衆叛乱にたいする備一手段として、騒乱罪発動にふみきつたことを意味する。

そして同時にこれは、騒乱罪発動による国家権力、機動隊の大衆叛乱の最前線にたいして騒乱罪発動をためらっていた国家権力は、戦術的組織部隊がひきあげた大衆の組織的抵抗の可能性がなくなり、したがって発動された騒乱

こうして、一〇・二二闘争は、数万人大衆の連続地区占拠闘争の巨大な可能性を示したにもかかわらず左翼諸派がそれをうけた闘争として貫徹することをしなかったこと、国家権力の騒乱罪発動に名をなされることになった。

一〇・二九、三〇、一一・七の国会周辺地区におけるデモ大衆は、その当然の帰結であつた。ブルジョア階級と国家権力は、はたかたでてきた活動家階級を徹底的に弾圧攻撃することに

より、その背後にある大衆を煽動したのである。

そして、一〇・二二闘争を境にして、騒乱罪を真正面にふりかざす国家権力の機動隊の季節、あらゆる大衆力闘争にたいする「法と秩序」の治安弾圧の季節がはじまった。

そしてついにこれは、上智大学のロックアウト攻撃をきっかけにして、学園バリケード闘争による真正面からの権力攻撃へとむかいはじめたのである。

では、一〇・二二以後の日本の安保階級闘争のこうした展開にたいし、年末から一月にかけて展開をむかまつた東大闘争

では、一〇・二二以後の日本の安保階級闘争のこうした展開にたいし、年末から一月にかけて展開をむかまつた東大闘争

C 東大闘争の地位

では、一〇・二二以後の日本の安保階級闘争のこうした展開にたいし、年末から一月にかけて展開をむかまつた東大闘争

は、どういった地位にたっていたのか。

まず明らかなのは、一〇・二二以後、街頭制庄闘争は、はつきりと後退局面にたっており、権力弾圧のまえに萎縮していたということである。

これは、一〇・二二で大衆的地地区占拠闘争を保障せず、したがって一〇・二二以後の階級闘争の局面転換を理解できず、一一・七で活動家部隊だけの対中央権力デモを組織して大衆逮捕をうむった新左翼諸派が、一一・七以後、一転して権力弾圧のまえに萎縮しはじめたことによる。

だが、同時に明らかなのは、七〇年闘争に直接につながり、しかも六月の安保破壊運動期限日と秋の佐藤訪米という二つの政治焦点をむかえる六九年闘争において

そしてそれは、さしせまる国家権力の弾圧にたいし、東大闘争の大衆的制庄と、東大、日大、神田地区の大衆的地区占拠闘争とをもつて、一言いえるは、東大、日大、神田地区を第二の新宿とすることによって、闘争以外になかった。

東大闘争とそれにつづく日大闘争は、まさにこのようなものとし

て、たんに全国学園闘争の天王山をかたちづけていたばかりでなく、六九年階級闘争全体の突破口

A バリケード

派への大衆結

集

では、これにたいし、東大闘争自体は、年末から一月にかけて、どういった内部闘争局面にあったのか。

これを知らなければ、東大闘争の二つの大局面の質的差異を知らなければならぬ。

二何が東大闘争に問われていたか

く、六九年階級闘争全体の突破口の地位にたっていたのである。

部闘争から文字どおり全学闘争へと発展したのは、六・一七の機動隊導入、六・二八の総長閉会をきっかけにしてであつて、これ以降の東大闘争は、大河内辞職、加藤執行部登場をはさんで質的に異なる二つの大局面にわかれる。

第一の局面は、安田謙吉再出陣、拠点占拠ストライキの全学無期限占拠ストライキの拡大の時、バリケードへの一歩、大衆的制庄の闘争、直ちに軍事的教養会結成にたいする一般学生大衆の大衆的叛乱の時として、特徴づけることができる。

だが、明らかなにこの時期のこう
したバリケード派への大衆的集
は、旧来の大学自治の理念の限界
内で大学改革を押しすすめる学生自
治を拡大しようとする中間条件派
大衆が、不当処分紙撤回、機動
隊導入自己批判、大衆団交開催な
どの「七項目要求」を軸にして、
バリケード派に合流したことにも
とづくものであった。

つまりそれは、相異なる二つの
潮流、旧来の大学自治を真正面か
ら否認してこれに学生自己秩序な
いし自己権力を対置しはじめつ
つあったバリケード派—学生コミ
ューン派ないしソウエト派—
と、旧来の大学自治の立場から闘
争に立ちあがった中間条件派大衆
との「七項目要求」を軸とする過
渡的な一時的一致、「うるわしき
一致」にもとづくものであった。
したがって、この時期における

日共・民青のねらいは、バリケ
ードに引き込まれたライオンにたいし
自治会ベースのキャンパニア・スト
ライキを対置しつつこの二つの潮
流のあいだにくさびをうちこみ、
それによって両派の闘争を体制
内の圧力型条件闘争にすりか
え、それをすくからの政治指導権
のもとに統括することであった。
これらの武装隊は、このための
「組織された暴力」にはかならな
かった。

B バリケード 派の少数革命 派への転化

だが、こうした状況は、大河内
の退陣・加藤執行部の登場によ
ちに変化した。

まず第一に、加藤執行部は、全
学集会と大衆闘争に積極的になす
る態度をうちだし、八・一〇告示
の撤回、処分制度の再検討、大学
自治を教員会自治に規定する東大
パンフの廃止、矢内原三原則の停
止等の「七項目要求」にたいする
一定の妥協案を提示した。
これは明らかに、バリケード派
とそれにつきあがっている中間
条件派大衆とのあいだにくさびを
うちこみ、後者との取引による事
態の收拾をねらったものであっ
た。

つまりそれは、一九〇五年のロ
シア革命におけるツァーリの勅勅—
憲法制定議會を約束する詔勅—
であった。

だが第二に、バリケード派は、
こうした加藤執行部の收拾政策に
たいし、その意図と限界を暴露し
中間条件派大衆をみすからの側に

ひきつけるための有効な大衆的
戦術を欠いた。

こつした戦術とは、バリケード
派の指導部のもとに大衆闘争を
現し、大衆団交を通じて加藤執行
部・教員会を包囲追及の人民運動
に引きこみ、そのうちに、
うごめきこんであり、
の前提として、バリケード派に
よる大衆闘争の旗印しのもとに日
共・民青の武装部隊を紛砕するこ
とであったが、しかし、当時バリ
ケード派の指導部をにぎっていた

觀念左翼諸派の諸君は、全学封鎖
貫徹、全学集会紛争を抽象的に叫
びたことに終始しただけであ
った。

だが、明らかにこれは支吾句で
あった。
なぜなら、全学封鎖は、日共・
民青の武装部隊の紛砕なしには実

現不可能であったが、これら觀念
左翼の諸君は、そのための準備も
なければ意志ももたなかったから
である。

第三に、一二月にはいるとも
に、政府・自民党は、卒業、入学
試験のタイム・リミットを強制し
長期大学閉鎖による東大停学成、
大衆への直接攻撃の手段をく
りかえした。

こうして、バリケード派に闘争
の勝利の收拾の展望なしと感した
中間条件派大衆にとっては、残る
ところのはつきの二者択一だけとな
った。

すなわち、加藤提案の承諾によ
る現存体制の若干の改良か、それ
とも政府自民党による長期大学閉
鎖と現存体制の反動的再編か、と
いう二者択一が、これである。
そして当然に中間条件派大衆は

加藤提案承諾によるヘト收拾と人
試実現を選択したのであるが、こ
れは、かれらが政府自民党の東大
解体の構図におびえて、より少な
い悪として、現存秩序、旧来の大
学自治と教授会秩序のなかに大衆
して進出しようとしたことを意味す
るものであった。

こうして、ヘト收拾、入校復
の東大へ、全学封鎖をへることに
同意するものは、
民青の役割は、現存体制へのこの
大衆の進出を組織し、それを武力
で阻止しようとしたバリケード派
にたいして、かれらを武装すること
であった、あるいはむしろ、こ
の大衆の現存秩序への進出に依拠
して、バリケード派を武力鎮圧す
ることであった。

それはまさに、現存秩序の第二
暴力であった。

こうして、結局、バリケード派
は、革命的少数派となった。
そしてこれが、加藤執行部の登
場とともににはじまった東大闘争の
第二局面の特長であった。

C バリケード 派の分解

では、こうした局面において、
革命的少数派としてのバリケード
派に問われたのは、どのような戦
術であったのか。

全学を閉鎖する学生、労働者諸君、
それは、旧来の革命的独断の
戦術、すなわち戦線から撤退しつ
つある中間大衆とそれを暴力的に
組織しつつある日共・民青にたい
するバリケード派の断固たる革命
的独断の戦術以外にはありえない
一二月二四日の医学部のスト解

除学生大会の紛争、一月六日
の農学部のスブ解、除学生大会紛争
闘争は、明らかにそうした方向を
めざすものであった。

だが、バリケード派は、断固
たる革命的独断による戦術的大衆
の結集が必であったこと、
とくに、日共民青の教員と革
命的少数派とに分解した。

すなわち、それまで全学封鎖、
全学集会紛争を文句的に叫びた
てて中間大衆を誘導することに熱
中してきた左翼諸派諸君は、現実
に革命的独断が必である
うそのために、封鎖の工口をレ
ン・ガムに引きこみ、
の自由民衆を包囲し、そ
れを口実にして、中間大衆の戦線
撤退を武力をもって組織しつつあ
る日共・民青との平和共存路線を
追求しはじめたのである。

D 消極的防衛

主義への転落

こうしてセクト左翼諸君の愚意の日和見主義、敗北主義の結果は、明白であった。

それは、断固たる革命的行動による戦闘的大衆の結集の必要なきにそのときにバリケード派がバリケードの消極的防衛主義へと転落し、バリケードの物理的強化にのみ専念したということである。

しかも、これはかりではない。これらセクト左翼諸君は、東大キャンパスに大衆をひき入れ大衆によってキャンパスを埋めつくすことがなによりも要求されていた。まさにそのときに、正門等々のバリケードの物理的強化し、急ぎいで駆けつけてきた大衆をキャンパスから排除し除外すること

れていたのは、断じてそうした消極的防衛主義ではなかった。

それは、一〇・二二闘争以後の安保階級闘争の特殊な後退局面に阻止のをかけ、六九年闘争への突破口をひらくことであり、東大キャンパスの大衆的制圧を軸にする東大、日大、神田地区の大衆的古典型をもつて機動隊弾圧をはねかえし、それによって一〇・二二以降の壁前罪何喝を無力化することであった。

そしてそれが、東大闘争自身の内部局面からみても勝利への展望をきりひらく唯一の方法であった。

すなわち、勝利への展望は、そうした闘争によって、一人一票の形式民主主義のスト解除決議や機動隊によるバリケードの二時的破壊が事態のなんらの解決を意味しないことを大衆権力と国家権力に

に集中してゐる。これは明らかに、バリケードをセクトの私物化するものであった。だが、一月二日の夜、日共・民青の武装部隊によって安田講堂で包囲され、バリケードが危機におちついたとき、それを救ったのはセクト左翼諸君ではなく、急を聞いて駆けつけてきたこれら一般学生大衆ではなかったのか。

セクト左翼諸君のこうした大衆不在の消極的防衛主義は、一〇・二二と一一・七以降、これら諸君が、街頭だけでなく学園においても、国家権力の喝喝と日共・民青武装部隊の暴力におびえ、それと闘う意志も力も失なっていたこととあらためて暴露するものであった。

だが、くりかえして確認すれば、この瞬間に東大闘争に要求さ

せ分離せざるを以外にはなかった。たのである。

この瞬間に東大闘争に要求さ

A、バリケード防

衛戦と神田カル

チェ・ラタン闘争

こうしてセクト左翼諸君の消極的防衛主義の結果として、一八一九日の国家権力・機動隊との攻防戦は、東大では、バリケードにたもつた数人の活動家部隊だけのバリケード防衛戦となった。

東大周辺では、急を聞いて駆けつけてきた学生、労働者、市民と機動隊との押しつ押しされつの大衆

的対峙戦となったが、これは、散発的な反乱戦ともなつただけで組織的な闘いへと発展しなかつた。

東大構内自体にまぎれて学生労働者、市民の大衆部隊が導入され、これら大衆部隊によって東大キャンパスが埋めつくされていなかったのが致命的であった。

また、神田地区では、ここに一九日には、日大、中大、明大、もろの活動家部隊だけとなり、これ以外の闘争は、基本的に、それについていふべき威力的闘争にと

〇時半頃には、すでにバリケード

肉の戦闘的組織部隊はひきあげており、バリケード周辺で機動隊と闘ったのは、主として、一般学生、労働者、市民であった。

つまり、神田カルチェ・ラタン

闘争は、じつさいには、国家権力・機動隊の東大攻撃に対する示威的連帯闘争、示威的連帯闘争としての地区占拠・バリケード闘争の限界をたいして超えることができず、第二のカルチェ・ラタン、第二の新宿とはなりえなかったのである。

こうして、結局、一八一九日の闘争で国家権力・機動隊との徹底抵抗戦の闘争を貫徹したのは、東大バリケードにたもつた数人の活動家部隊だけとなり、これ以外の闘争は、基本的に、それについていふべき威力的闘争にと

まつたのである。

全都全国の学生、労働者諸君、われわれは痛切に、この事実を諸君に強調する。

またわれわれは、こうした事態が決して偶発の産物ではなく、昨年一〇・二二以降のセクトの左翼諸派の傾向の必然的な産物であることを強調する。

一〇・二二闘争で、これら諸君は、闘争しつつある数万人大衆を置きざりにして新宿からひきあげ、そのことによって国家権力の暴乱罪喝喝を可能にした。

二二闘争を貫徹しなかったことの帰結にすぎない。

また、一一・二三の東大総決起集会では、全都・全国から集った数千人の部隊をたんなる集会、口ゲバ棒まっしぐらに解散させ、口

日 大衆闘争組 織の再建へ

全国の労働者、学生諸君！

なつたといふことであり、そのなかから一方では國家権力・機動隊秩序が、他方では東大バリケードの二目になつて徹底抗戦の事実とバリケード派内の戦闘的、革命的闘争が、浮かびあがつてきたといふことである。

要するに、東大闘争は、いつさの機動的対決や中間的交渉物の幻影をばきとつて事態を単純化し、真の対決、真の闘争を浮かびあがらせたのである。

その真の対決、真の闘争とは、いうまでもなく、ブルジョア國家権力とバリケードの勢力との対決、ブルジョア執行権力と学生闘争の対決、工場占拠・街頭制圧のゼネスト叛乱にむけて巨大な歩みを開始した日本の労働階級人民との対決にはかならない。

六七年秋の二つの羽田闘争にはじまり本年一月の東大闘争にいたる日本の安保階級闘争は、これまでそれを主導する地位にあつたすべての新左翼諸派を大衆闘争の鉄火によつてテストした。

これら新左翼諸派が、その觀念的、小兒病的、イデオロギー左翼的限界のゆえに、大衆闘争の指導に耐えないことは、すでに六八年前半に暴露されていた。

全事連、反戦青年会は、現実の闘争とは無関係な二流諸派のセクト的対立のために分断され、すでに半壊不慮となつていたのである。

だから、六八年夏以降の日本階級闘争を現実になつてきたのは、

じつは、これらセクト諸派の諸君ではなく、あらたに生れてきた活動家大衆であつたのであり、ゾンボリ・ラジカル、群衆、市民、等々といふ名の戦闘的労働者、学生大衆であつたのである。

だが、これら活動家大衆、戦闘的大衆は、日大等々の二、三の例外をのぞいて、ほとんどのはあい、自己を組織すべき独自の大衆闘争組織をもたなかつた。

だからこそ、これら大衆は、その巨大な戦闘的エネルギーにもかかわらず、觀念左翼諸派のセクト利害にひきまわされ、自己の戦闘性を行使することができなかったのである。

一〇・二以後の諸闘争、ことに東大闘争は、このことを一目標に燃らした。

全国の労働者、学生諸君！

このことは、反戦青年会、全学共闘会議、全学闘争連合、等々の大衆闘争組織の自立的な再建ないし建設が、そしてその地方的、全國的結合が支配階級と國家権力の総攻撃をむかへつた今日の日本の階級闘争にとつて当面の急務であることをものがたつていふ。

大衆闘争委員会、大衆的共闘組織の共闘組織、そのもとの実力防衛隊の建設、それらによる労働者、学生階級の再建、——それが、一言でいえば、労働者、学生をのソヴェトだ。

全国の労働者、学生諸君！
だが、こつちの大衆闘争組織の再建と建設は、それを何處かに限する共産主義大衆組織によるものではない。

われわれはこれに、労働者・学生安保粉碎共闘会——日共産同盟——共産党の三者の結成とし

て諸君に提起する。

工場占拠、学園占拠、街頭制圧、基地包圍の安保粉碎ゼネストで日

本革命および世界革命の突破口をきりひらくために、安保粉碎共闘、青年共産同盟、共産党に結集せ

よ！

激化する

B六判上製三六頁 七〇〇

世界危機と現代革命

岩田弘編著

マルクス主義の今日的課題

今日、目前で音をたてて進行する戦後世界経済体制の崩壊過程にあつて問われているのは何か、前衛党の綱領を分析しつつ現代革命の展望を示す。

〔問い合わせは前衛社か両地社〕

東京都千代田区神田神保町二二三

大同会館内

両地社

TEL二六二二二五七二

振替 東京一〇五三三八

☆最寄の書店に注文して下さい

「武装」第一号

一〇〇円

一九六九年五月十五日発行

編集 青年共産同盟

中央委員会

東京都千代田区飯田橋三二

一六飯田町ビル「前衛社」

(電) 二六四一八六六九

